

年下少女漫画家とドキ ドキ！？ 共同生活！

チャンドラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて大手週刊少年誌『ジョーク』に連載していた白河健二（しらかわけんじ）は新しい連載に向けて、日々漫画を制作していた。

しかし、中々結果が出せず、バイトに明け暮れる毎日を送っていた。

そんな時、健二は彼の編集である相馬千尋（そうまちひろ）からアシスタントの紹介を受ける。

アシスタントの条件は住み込みで働くことであり、彼は承諾した。

しかし、アシスタント先の先生はなんと健二よりも年下の美少女であった。

少女の名は岩木瞳（いわきひとみ）。大人気漫画『桃仁少年』の作者である。

彼女との出会いを通じ、健二の運命は大きく揺れ動くこととなる。

目次

白河健二 | 1

岩木瞳 | 11

共同生活の始まり | 22

成長 | 33

パーティ | 43

郡山一志 | 53

締め切り前 | 62

好きな漫画 | 70

水族館 | 80

トリックアート | 91

妹来襲 | 101

描き続ける理由 | 110

実家 | 117

解雇通告 | 127

自分の気持ち | 139

新たな始まり | 155

連載に向けて | 166

新しい物語 | 174

白河健二

梅雨が明けず、連日雨が降り続く六月の下旬。この俺、白河健二（しらかわけんじ）は自分の生活の拠点であるアパートの一室でとある電話を待っていた。

その報告とは連載会議の報告結果である。

俺は小学校の頃から漫画が大好きで、小学校高学年の頃に漫画を描き始めた。

幸運にも高校一年の時に新人賞に投稿した漫画が編集者に目に留まり、日本を代表する週刊少年誌『週刊少年ジヨーク』で連載を勝ち取ることができた。

連載に集中するため高校を中退したのだが、初の連載となる漫画はわずか半年で打ち切りとなり、以降は新たな連載に向けて、ネーム作りを行うもなかなか連載まで漕ぎ付けることが出来ないでいる。

年齢もすでに十九歳となっており、世間的には就職するか大学に進学するのが普通であるが、バイトの傍ら漫画を描く生活を送る羽目になっている。

そろそろ連載を獲得しなければ経済的にも厳しい。すると、机の上に置いていたスマホが『ブルル』と振動した。

恐る恐るスマホを確認すると、発信者は担当者からだった。

「も、もしもし?」

『あー、健二くん? お疲れ様』

透き通るような声が耳に届く。声のトーンからして、落ち込んでいるのか喜んでいるのかよく分からない。

「こ、これはどつちだ……?」

「お疲れ様です。どうでしたか?」

「うーん……今回は残念だったかな」

「そ、そうですか……」

今回もまた連載会議に落ちてしまった。担当さん、連載会議に出すときは「絶対に大丈夫!」って自信満々に言っていたのに。

とはいえ、落ちたのは自分の責任だ。担当さんを責めるのはお門違いというものだろう。

「うん。また頑張ろう。明日ちよつと相談したいことがあるんだけど、時間大丈夫?」

「はい。午前中はバイトがあるので、午後二時からであれば」

「了解。それじゃ、いつものファミレスで」

「分かりました」

電話を切り、床に倒れこんだ。頭を真っ白にしてボーと天井を眺める。

くそ……何だつてこう、俺は連載会議が通らないんだ。

小学校の頃、日本一の漫画家を目指すとか心に決めていた。それなのにこの体たらく。俺は才能がないのか。もう漫画家なんて諦めるべきなのだろうか。

半ば自暴自棄になりながら、俺は床でそのまま就寝した。

次の日。目を覚ますと、身体のいたるところが痛くなっていた。硬い床の上で寝ればそうなるのも当然だろう。

重たい身体を起こし、冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の中には賞味期限ギリギリの豆腐しか入っていない。

俺は冷蔵庫から豆腐を取り出すと皿の上に乗せ、醤油を垂らした。

「いただきます」

橋で豆腐を食べる。これが今日の朝食である。収入も少ないため、毎朝の食事はいつもこんな感じである。

昼食後は髭を剃り、顔を洗ってコンビニのアルバイトへと向かう。

連載が終了直後に始めたバイトであるが、俺は一体いつまでコンビニのアルバイトをしなくてはならないのだろうか。

「おはようございます」

先にシフトに入っているコンビニ『フレンドリーマート』の店長、小坂明梨（こさか

あかり)さんに挨拶した。

「おはよう、健二くん」

コンビニ制服に着替え、レジの前に立った。

「健二くん、何だか元気なさそうだね」

明梨さんは心配そうに俺に話しかけてきた。

明梨さんは今年で二十八歳になる若手の店長であり、仕事のスキルも高く、スタッフからの信頼も厚い。

俺は自分が漫画家を志していることも明梨さんに告げている。

「はい……実は昨日連載会議に落ちてしまっ」

「あら、そうなの」

連載会議に落ちたことを正直に伝えようと、明梨さんは少し申し訳なさそうな表情を見せる。

もしかしたら無駄に気を使わせてしまったかもしれない。

「すみません。変に気を使わせて」

「ううん。落ちたのは残念だったけど、また挑戦するんでしょう？」

また挑戦か……もう三年近く連載会議に通っていないのだ。そろそろここらが潮時なのかもしれない。

親も俺が漫画家を目指すことについて、反対していたが高校一年の時に連載を獲得し、何とか認めてもらった状態である。

連載会議にも通らず、プラプラとフリーターをしている息子など、ただの恥さらしもいいところだろう。

「えつと……そろそろ諦めて就職しようかなとも考えてます」

明梨さんにそう告げると、彼女は『バン』と強く肩を叩いてきた。

「あたー！」

「なーに言ってるの！ 私、健二くんの漫画読ませてもらっけど、とても面白かったわ。健二くんには絶対に才能があると思う。私が保証する！ まあ、私なんか保証してもあまり意味ないでしょうけど」

「あ、明梨さん……」

明梨さんに励ましの言葉を掛けられ、何だか不思議と自身がみなぎってきた。

こんなとき……いや、こんなときだからこそ他人からの激励というのは力を貰えるの
だろう。

「健二くん。諦めたらそこで試合終了ですよ？」

諦めたらそこで試合終了か……全くもってその通りだ。

「分かりました。俺、もう少し頑張ってみます！」

再び気合を入れ直した俺はバイトに励んだ。

「お疲れ様でした！」

「うん、また次のシフトでね！」

明梨さんに挨拶し、コンビニを後にした。早速、いつも打ち合わせで使用しているファミレスへと向かう。

「いらつしやいませー」

店に入ると店員が迎えてくれた。店員に「おひとりさまですか？」と聞かれ、「いえ、二名です。待ち合わせしています」と返答し、担当さんの姿を探した。

奥の席に担当さんの姿を確認することができ、そこへと向かう。

「お疲れ様です」

「お疲れ、健二くん」

見た目二十代前半の金髪の女性——俺の担当である相馬千尋（そうまちひろ）さんが挨拶を返した。

千尋さんは今年の四月から新しい担当となり、この前提出した連載用ネームについて、相談していた。

椅子に座り、千尋さんと向かい合う。

「この前の連載ネームは残念だったわね」

千尋さんは明るい口調で嘆いた。

テンションのせいでイマイチ分りづらいが、なんとなく悔しがつているのが伝わってくる。

「次の連載会議で連載取れるでしょうか？」

「うん！　今回は大御所の作家さんとぶつかつたから落ちちやつたけど、次はイケると思う！」

自信満々にそう言い張る千尋さんを見て、少し自信が湧いてきた。しかし、ここであつ問題があつた。

「あの……すみません。実は言いづらいことがあるんですが……今、経済的に厳しい状況に陥つていまして。アシスタントの仕事つてありますか？　できれば今のバイトと掛け持ちできるようなところで」

そう、自慢じゃないがすでに俺は住んでいるアパートの家賃を三ヶ月滞納している。

貯金はほとんど底を付き、今年で還暦を迎える大家さんからは「引つ越せ！　引つ越せ！　滞納するなら引つ越せ！」と強く責められていた。

漫画に専念するため、出来るだけバイトの数を減らしていたが、さすがにもう少しバイトを増やすなり、アシスタントするなりしないと生活するのもままならない。

「アシスタントね……そっか」

千尋さんは顎に手を乗せ、なにやら深く考え込んだ。ただ、アシスタントの口を尋ねただけであるが、何か問題でもあっただろうか。

「あの……千尋さん？」

「ああ、ごめん。今日ちようど健二くんにアシスタントの勧誘をしようと思つてたのよ。ねえ、健二くん。アシスタントする先生が自分より年下でも大丈夫？」

「年下の先生ですか？ はい、大丈夫です」

特に問題はなかった。確かに漫画家を志している人の中にはプライドが許せず、自分より年下の先生のアシスタントはしたくないという人もいるかもしれないが、俺は特にそういったこだわりはない。

「そっか。後、良かったら何だけど、住み込みでアシスタントしてくれないかな？」

「す、住み込みですか……？」

今まで何度かアシスタントをしたことはあるものの、住み込みでアシスタントをするというのは経験がなかった。

「うん。こういつちや何だけど、私生活がズボラな子でね。だから、身の回りのことをしてくれる人がいれば助かるって言つてたんだ。住み込みなら家賃はただになるし、どうかな？」

つまり、アシスタントだけでなく家事的なことでもする必要があるということか。まあ、俺も一人暮らしをしているから、家事についてはそこまで苦手ではない。

それに家賃がタダというのは大きなメリットである。

「ええ、いいですよ」

「ありがとう！ それじゃ、明日先生のところに挨拶に行ける？」

「はい、明日は特にバイトも入ってないので何時でも大丈夫です」

「分かった。明日の十時に集用社の入り口のところで待っていてくれる？」

「分かりました！」

その後、次の会議で出す連載ネームについて話し合った後、千尋さんを別れた。

アパートに戻り、手元に残っているお金の中から滞納した家賃を大家さんに収めた。

また、アパートを今月でアパートを解約したいという旨を伝えると、予想に反して「そっか。なんだか寂しくなるねえ」と言われた。

今まで大家さんに散々迷惑を掛けたのにも関わらず、そう言われて少し目頭が熱くなった。

バイト先から買ってきた本日発売のジヨークを読むことにした。

表紙には『ロボット・プラネット』の絵が大きく描かれている。

やはりいいな、カギリリス先生の漫画は。

俺は小学高の頃、カギリリス先生の漫画を読んで漫画家を志した。

当時、ジョークに彗星のごとく現れたカギリリス先生は『A・I・バスター』という人類と人工知能との壮絶な描いた漫画の連載を始めた。

初めてカギリリスの先生の漫画を読んだとき、高い画力とストーリーに感激を受けた。それ以来、俺はカギリリス先生のファンとなった。

一度限カギリリス先生に挨拶をしたいと思っているが、連載を獲った直後の新年会という名のパーティではカギリリス先生は出席しておらず、会うことができなかつた。

また、連載を勝ち取り、カギリリス先生にキチンと挨拶したいものである。

ジョークを読んだ後、明日に備えて就寝した。

岩木瞳

次の日の朝、スマホのアラーム音で目を覚ました俺はカーテンを開けた。

目を突き刺すようなのようなくらい光が窓から差し込む。

顔を水で洗い、昨日冷蔵庫に入れておいた焼き鳥の缶詰を食べることにした。

「あー、うめえ」

焼き鳥からソースの甘みと旨みを感じられる。欲を言えば、ご飯とともに食べたいところであるが、あいにく米は切らしている。

朝食を食べ終えた後は普段着に着替え、軽く絵の練習がてらGペンで『ロボット・プラネット』の主人公を模写した。

十分ほどの時間を掛けてさらっと描いたものであるが、なかなかいい出来である。別のキャラクターも模写する。

絵の練習をしていると、丁度良い時間になったため、集用社へと向かうことにした。

俺が住んでいるアパートは御成門駅が最寄駅であり、御成門駅から十分ほど電車で揺すられ、神保町駅に降りる。

集用社は神保町駅から徒歩一分で到着することができる。すでに入り口付近に千尋

さんが立っているのが確認できた。

「おはようございます。千尋さん」

「おはよう健二くん。昨日はちゃんと眠れた」

「ええもう、ぐつすりです」

昨日、ジョークを読んで心がスカッとしたため、熟睡することができた。

「そう。良かった。車を取って来るからちよつとここで待つてて」

千尋さんを待つている間、スマホを弄って待つことにした。ツイッターで『#ジョーク』と検索する。

こうすることで、今週発売のジョークの感想を見ることができるのである。

ツイッターを見た限り、カギリリス先生の『ロボット・プラネット』よりも、岩泉龍泉先生の『桃仁少年』の方が人気のようなのである。

「お待たせ、健二くん」

いつの間にか千尋さんが戻ってきていた。俺は千尋さんが持ってきた黒い車に乗り込む。

「それじゃ、行くわね」

千尋さんは車を発進させた。車が軽く振動し、ゆっくりと全身を始める。

車に乗ってから気づいた。アシスタントする先生が誰なのか千尋さんから知らされ

ていない。

「そういえばまだ聞いていませんでしたね。俺がアシスタントする先生は誰なんでしょうか？」

「岩泉龍泉先生よ」

千尋さんは視線を真つ直ぐにしたまま答えた。

まじか……あの大人気漫画『桃仁少年』を担当している岩泉龍泉先生のところのアシスタントをすることになるのか。これはかなり勉強になるな。

「岩泉龍泉先生って俺より年下だったんですか……初めて知りましたよ。一体何歳なんですか？」

「十七歳よ。その歳であの画力……本当すごいわよね」

岩泉龍泉先生は画力が高いことで知られている。一枚の絵の書き込みは他の漫画とは一線を画する程であるが、作画に時間を掛けすぎているのか、たまに休載になることがある。

「俺、ちゃんとアシスタントできるでしょうか……ちよつと不安になってきました」

何度かアシスタントを経験してきた俺であるが、担当したどの先生も画力に関しては、俺の方が上であつたと自負している。

自慢ではないがこと画力に関してはかなりの自信を持っていた。

デビューのきっかけとなる月例賞という賞に応募した時、画力の高さを評価してもらえ、なんとか賞を獲得することができた。

一方でストーリーを作る力についてはまだまだ未熟であると自負している。

「大丈夫だと思うわ。健二くんの絵は素晴らしいもの。今回のアシスタントは健二くんにピッタリだと思うわ」

「他に働いているアシスタントの方もいるんですよ？」

「いえ、いないわ」

「ええ!？」

衝撃の事実を聞き、思わず驚きの声を上げてしまった。月刊連載ならともかく、週刊連載でアシスタントがいないなんて普通はあり得ない。

「何人かアシスタントとして働いていたんだけど、誰もあの子の画力に付いていける人がいなくてね……それに拘りが強い子だし」

やばい。益々不安になってきた。こんなことならちゃんと担当する先生の情報を知っておくんだった。

千尋さんはとある高級マンションの駐車場に入り、車を停めた。

「それじゃ、行くわよ」

「はい……」

気が乗らないがしようがない。これも一種の試練だと思つて頑張るしかないか。

今までだつて厳しい先生と仕事をしたことがあるが、その度に成長することができたと自負している。

それにしてもさすが超人気作家。良いところに住んでるな。家賃、一体いくらなんだろうか。

高級マンションのエスカレーターを使って、七階に上がり、703号室の前に立ち止まった。

千尋さんはインターホンのボタンを鳴らすが、誰も出てくる様子がなかった。

「留守ですかね？」

すると千尋さんは無言のままドアノブに手を掛け、回した。『ガチャツ』という扉という音と共に扉が開く。

「空いてる……多分、また部屋で寝ちやつてるみたいね」

「鍵も掛けずに……随分と不用心ですね」

「いつものことよ。それじゃ入りましょう」

いつものことなのか……

俺と千尋さんは靴を脱いで、部屋の中へと上がり込んだ。中は高級マンションだけあって、リビングに続く廊下もとても広く、豪華そうな洗濯機や冷蔵庫などが目に留ま

る。

「失礼するわ!」

千尋さんはリビングの扉を開けた。しかし、リビングの中には人がいない。

「やっぱり、留守ですかね?」

「いや」

ツカツカと歩く千尋さんの後に付いていくともものすごい光景が目に入った。

「ちよつと、岩泉先生起きて!」

千尋さんは床で寝そべっている『少女』を揺すった。少女は不機嫌そうな表情で目を擦るながらこちらを一瞥した。

水色の髪に青いジャージに下は下着のみというとてもない姿——この人が岩泉龍泉先生のものである。

白い肌端正な顔立ちをしているその少女は俺が想像している人とかけ離れていた。というか、作風的に男が描いているものだと思っていた。

「千尋、誰この人?」

「今日から仕事するアシスタントの人よ。昨日、電話で言ったでしょ!」

「あー、そういえばそうだった……」

岩泉先生は大きく腕を伸ばすと、あくびをしながら立ち上がった。反射的に岩泉先生

から目を逸らしてしまう。なにせ、下は穿いてないのだ。

「ちよつと岩泉先生！ 下、穿いてないじゃない。仮にも男の人の前なのよ！」

「だって、千尋が男だけ大丈夫だっていうから」

「確かに言ったけど最低限節操ある服装をしないと！」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 千尋さんいいですか？」

「え？ ちよつと何、健二くん？」

俺は千尋さんの腕を掴み、リビングから出た。

「どういうわけですか！ 俺が担当する先生って女性の方だったんですか？」

「いやーねー。女性って言っても健二くんよりも年下じゃない。全然大丈夫でしょう？」

何が大丈夫だと言うのだろうか。まるで意味が分からんぞ！

「男の先生じゃないって知っていたら、少なくとも住み込みでアシスタントしようとなんて思いませんでしたよ……」

「けど、健二くん。妹さんがいるんでしょう？」

「そうですけど……」

妹がいたからなんだと言うのだろうか。

「あの子も妹みたいに接すれば大丈夫じゃないかしら」

「ちつとも大丈夫じゃありませんよ！」

その理屈で言えば、妹がいる男は年下の女性に全く手を出さないということになるだろう。

すると扉が開き、岩泉先生がムスツとした表情で俺たちを見つめていた。そして、相変わらず履いていない。頼む、履いてくれ。後生だ。

「ねえ、二人とも。隠れてコソコソと何してるの？」

「すみません岩泉先生。とりあえず、下履いてもらえますか？」

「えー、めんどくさいんだけど」

俺が必死に頼み込むも、『めんどくさい』の一言で拒否された。この少女は……恥じらいというか、男に対して警戒心みたいなものを持っていないのだろうか。

「お願いします！ なんでもしますから！」

「……つたく、分かったよ」

岩泉先生は渋々と承諾し、別の部屋に入っていった。俺と千尋さんはリビングにある椅子に座って、岩泉先生が着替え終わるのを待っていることにした。

「お待たせ」

岩泉先生はジャージ姿でリビングに戻ってきた。

色々と言いたいことはあるものの、椅子から立ち上がり挨拶することにした。

「初めまして。白河健二と言います。よろしく願います」

「健二くんは二年前に連載していたこともあってね。絵がとても上手だから岩泉先生の役に立つと思うわ」

「初めまして。岩木瞳です」

「岩木瞳？」

「私の本名。これから住み込みで働いてくれるって千尋から聞いてるんだけど、家事とか得意なんだよね？」

「ま、まあ……得意ですけど……けど、住み込みで働くなんてできません！」

俺は断固たる決意で拒否しようとした。しかし、当の岩泉先生は不思議そうに首を傾げている。

「なんで？」

「なんでって……俺は男で先生は女性じゃないですか！」

「そんなの見れば知ってるよ。千尋からも聞いてたし」

「し、知ってて承諾したんですか!？」

驚愕の事実であった。普通は断るだろう。

「うん。腕のいい家事もしてくれる有能なアシスタントがいるって聞いて。部屋一つ余ってるし、好きに使ってもいいよ」

「い、いやあ……でも」

困り果てた俺は千尋さんに目を向けるも、千尋さんはニコニコと微笑んでいた。

「ほら！ 岩泉先生もそう言ってることだし、健二くんもご好意に甘えたら？ 岩泉先生と一緒に暮らしていたらきつと漫画のノウハウも身につくよ！」

かなり強引な理論だと思っただが確かに一理あるかもしれない。

岩泉先生の生活を見れば、面白い話を作るコツ的なものが思い浮かぶかも可能性はある。

だが、同棲までする必要があるのでだろうか。

「それにさつき『なんでもする』って言ってたよね？ 千尋も聞いたでしょう？」

「うん、バッチリ聞いた」

く……この二人。しょうがない。大家さんにも今月中に家を出ると言っているのだ。いずれ、もう後には引けない状態ではある。

「分かりましたよ。住み込みで働かせていただきます」

「よく言ったわ健二くん！」

千尋さんは『パチパチパチ』と拍手した。もうこうなりややけくそだ。やってやる！

「それじゃ、健二くんだっけ？ 早速で悪いけど仕事してもらってもいい？」

「は、はい！」

「それじゃ、私は会社に戻るから。何かあったら連絡してね！」

そう言い残し、千尋さんはアパートを後にした。

「それじゃ、はい。これ原稿」

岩泉先生から原稿を渡された。原稿にはベタ、トーン番号、背景について薄い鉛筆で書かれていた。

「あの……トーンと背景の資料は？」

「この机に置いてるからここで作業お願い。他に分からないことあったら聞いて」

「分かりました」

俺はペンやインク、スクリーントーン、背景の資料等が煩雑に置かれている机の椅子に座った。

早速、今日から仕事を開始するわけか……とても緊張するが、やるしかないな。

共同生活の始まり

筆ペンにインクを付け、ベタ塗りする。作業を始めると時間を忘れて作業にのめり込むことが出来た。

「ふー……やっと終わった」

ベタ塗り、スクリーントーンの貼り付け、背景の書き込みといった一連の作業を行い、ようやく渡された原稿を終わらせることが出来た。

しかし、これを今度は岩泉先生にチェックしてもらい、やり直しがないか確認してもらう必要がある。

「岩泉先生、チェックお願いします」

原稿に向き合っている岩泉先生に話しかけたが、集中しているためか全く反応がなかった。

「あの、岩泉先生！」

少し大きめの声で話しかけるとようやくこちらを振り向いた。

「ああ……どうしたの？」

「渡された原稿、作業終わったので確認してもらえますか？」

「あー、分かった。それよりさ、お腹空いたから何か作ってくれない？ 冷蔵庫に入っているもの適当に使っていいから」

「そういうばすでに時刻は十三時半となっており、お昼ご飯のことをすっかり忘れていた。」

「分かりました。何か食べたいものとかありますか？」

「任せるよ」

岩泉先生はそう言うと、再び原稿に向き合った。任せるね……一体、何を作ったら良いだろうか。

とりあえず、冷蔵庫に入っているもの見て決めるか。

「これは困ったな……」

冷蔵庫の中を見てみたが、中には碌なものが入っていないかった。

人参、ジャガイモ、そして大量のチョコレートが入っている。チョコレート好きなんだろうな。

そして、カレールーもあった。

「これはカレー、一択だな」

具は人参とジャガイモのみになるが仕方がない。

キッチンにまな板を置き、ピーラーを使って人参とジャガイモの皮を剥いた。

皮を剥き終わると、包丁で細かく刻んでいく。鍋にサラダ油を敷き、人参とジャガイモを炒めた。

丁度良いくらいまで火を通ったら水を投入し、十分ほど時間をかけて温める。火を弱火にし、カレールーをゆつくりと溶かしていく。

カレールーを入れてから五分ほど経過すると、全て溶かし終わり、カレールーが完成した。適当に皿を見繕い、炊いた米とカレールーをよそい、リビングに持っていった。

「岩泉先生、昼食作りました。ここに置いておきますね」

リビングにある大きな木のテーブルにカレールーを置いていた。無我夢中で仕事をしていた岩泉先生はすぐにカレールーの方を見た。

「うわあ……美味しそう」

カレールーを見た岩泉先生は目を輝かせた。テーブルに駆け寄ると手を合わせ、「いただきます」と言い、早速カレールーを食べ始めた。

よし、俺も食べるか。正座し、カレールーを一口食べた。

うん、我ながら上手い。

「美味しいよ、健二くん。千尋の言っていた通り、料理上手なんだね」

「褒められるほどじゃないですよ。一人暮らしたから料理することが多いってだけです」

「そうなの？ 私は一人暮らしただけど全然料理できないよ？」

「そ、そうですか……」

不思議そうな顔で見つめられても困る。なんて答えたらいんだ。

「それにアシスタントとしてもかなり優秀みたいだね。さっきの原稿、オールオーケーだった」

オールオーケーか。少しばかりホッとした。

俺が初めてアシスタントした時、担当の先生からボロクソにけなされ、心に大きなトラウマを残したことがある。

「ちよつと聞きたいんだけどさ、健二くんはどんな漫画が好きなの？」

「好きな漫画……そうですね。やっぱり、カギリリス先生の『ロボット・プラネット』ですかね」

「ふーん、そっかあ……私の漫画はあんまり好きではない感じ？」

あ、やばい。ここは嘘でも「岩泉先生の桃仁少年が一番好きです！」と言うべきだっただろうか。

いや、俺は漫画に関して嘘はをつくことはできない。

「いえ、そんなことはありません。岩泉先生の『桃仁少年』も毎週楽しく読ませていただいています。ただ、正直に言うと個人的には『ロボット・プラネット』の方が好きです！」

「そっか。『桃仁少年』の中で一番好きなキャラはいる？」

俺の発言について何も気にする様子もなく、岩泉先生が一番好きなキャラについて尋ねる。

『桃仁少年』は桃太郎を基にしたバトル漫画で、魅力的なキャラクターがたくさん出てくる。

また、主人公の桃太郎は剣を用いた必殺技を操り、戦闘シーンは一見の価値がある。

「そうですね……雉島趙ですかね」

雉島趙は主人公、桃太郎の仲間で、雉族という飛行能力を持つ一族であり、銃を用いて戦闘を行うキャラクターである。天真爛漫な性格であり、とあるごとに事件を巻き起こす、トラブルメーカーでもある。

「そっか。やつぱり雉島は人気キャラみたいだね」

昼食を食べ終わった後、お皿を片付け、再び仕事を再開することにした。岩泉先生から新しい原稿を渡された。先ほどよりも背景を描く量が多く、かなり時間が掛かりそうであった。

資料を見ながら丁寧に背景を描きあげていく。今まで連載できず、ネームばかり描いていたため、背景などしばらく描いていかなかった。

そのため、一枚描き終えるのにかなりの時間が掛かってしまった。気がつけばすっか

り日が暮れており、夜六時になってしまった。

「岩泉先生、作業終わったので確認お願いします」

「分かった。後、悪いんだけど夕食作ってくれる?」

「構いませんけど……食材が碌なものないので何か買ってきますね」

「分かった。それじゃ、ちよつと待ってて」

岩泉先生は立ち上がると、別の部屋へと移動した。すぐに戻ってくると「はい」と白い財布を渡してきた。

いきなり財布を渡されて戸惑った。

「え、えつと……」

「領収書はちやんと取ってきてねー」

そう言うと、岩泉先生は再び仕事を再開した。いきなり財布をまるごと預けてくるとは想定外だ。

俺は気を取り直し、スーパーへと向かうことにした。

「ふー、すっかり遅くなってしまったな」

スーパーへと買い物に向かった俺であったが、献立を考えていなかったため、何をかうか模索していたらすっかり買い物を終えるのが遅くなってきた。

鍵の掛かっている部屋を開け、中に入った。よく考えたら不用心だな。今度買

い物に出るときは鍵を持って出るようにするか。

リビングに顔を覗くと、岩泉先生がリビングにいなかった。トイレだろうか？

買ってきた食材を冷蔵庫に入れ、料理を開始することにした。

俺がこれから作る料理はオムライス。俺の得意料理の一つであり、実家暮らししていたとき、俺が作ってやるとよく妹が喜んでくれた。

まずはチキンライスを作る。パック用のご飯をレンチでチンし、鶏肉から脂肪を切り取り、角型に切る。

「ふー、さっぱりしたー」

ふと、後ろから岩泉先生の声がした。後ろを振り向くと、バスタオルを巻いた岩泉先生がいた。

「え、え!? い、岩泉先生!?!」

すぐに岩泉先生から目を逸らした。なんで服を着ないでそのまま出てくるんだ! 「キヤツ! か、帰ってたの!」

岩泉先生はなぜか脱衣所ではなく、リビングの方へと駆け込んでいった。

やばい……心臓がバクバクと激しく鼓動している。陶器人形のように白い素肌に膨やかな双丘……大事な部分は辛うじて隠れていたが、淫美な姿が頭から離れなくなりそう……って何考えているんだ俺は!

「す、すみませんでした！ 岩泉先生！」

キッチンから大声でリビングにいる岩泉先生に謝った。

「う、うん！ 気にしないで！ 着替えたら呼びに行くから」

そこまで怒っているようではなさそうだ。気を取り直し、再び料理を再開することにした。

フライパンにバターをやや弱めの中火で熱し、バターが溶け終わるのを確認した後、鶏肉と玉ねぎを炒める。鶏肉と玉ねぎに火がしっかりと通ったら、塩と胡椒をかけて混ぜる。

火の火力を少し上げ、ご飯を加えてほぐしながらフライパン全般に広げた。

ご飯がパラパラとしてきたら、トマトケチャップを加えて混ぜながら炒め、ケチャップが全体に馴染んできたら火を止め、チキンライスをボールに移す。

次にボールに卵を二つと牛乳と塩少々加え、箸でしっかりとかき混ぜる。さつき使用したフライパンを軽く洗い、サラダ油を投じ、強めの中火で一分ほど熱する。

卵液を加え、固まる前にフライパン全般に広げる。卵が半熟状になったら火を止め、チキンライスを加え、ラグビーボールのような形になるようにして乗せる。そして、フライ返しを使って、卵をそつとチキンライスにかぶせる。

卵が破れないように十分に注意しながら皿に移し、卵にケチャップを掛けたら一人分

のオムライスが完成である。

「ねえ、健二くん？」

「うわー！」

急に背後から話しかけられ、振り向くと岩泉先生がしかめっ面しながら立っていた。ちゃんと服は着ている。だが、相変わらずのジャージ姿だ。

「すみません、さつきは……」

俺は反射的に深く頭を下げて謝罪した。ピンタされるのも覚悟している。

「ううん、私も服を着ないでウロチョロしていたのが悪かったし……それ、オムライスだよね？　すごく美味しそう！」

「はい。今、一人分作り終わったところです。もう一つ作るのでそれまで待っててください」

「うん、分かった！」

岩泉先生がリビングに戻るのを確認し、もう一つオムライスを作る。さらに買い込んだ食材で野菜スープも作った。

料理をリビングへと持っていき、テーブルの上に並べる。すでに岩泉先生は椅子に座っていた。

「それじゃ、健二くん。食べよう！」

「そうですね」

こうして、二人で夕食を食べることにした。スプーンでオムライスを一口掬い、口に入れる。卵のほんのりと甘い味が舌鼓を打つ。我ながらなかなか美味しかった。

ふと、岩泉先生を見ると、満足そうな顔でオムライスを食べていた。なんか少し妹に似てる気がしないでもない。

「美味しいですか？ 岩泉先生」

「うん。すごく美味しい……けどね」

けど……何か気に入らないところでもあっただろうか。

「健二くん。敬語で話さなくてもいいよ」

岩泉先生からそう言われて少し戸惑った。一応、岩泉先生は俺の雇い主に当たる。そう考えると敬語で話すのは当然のことである。

「そ、そういうわけには……」

「健二くんの画力の凄さは今日の働きぶりを見てよく分かったよ。全然原稿も指摘する必要ないし、さすがは連載していただけのことはあると思った」

「連載していたと言っても、半年だけですし……」

「まあ、そうだけど……とにかくさ、敬語は禁止ね！ あと、私のことも瞳って呼んでいいから」

「ひ、瞳……ですか？」

「そう。ほら瞳って呼んでみて」

「ひ、瞳……」

「そうそう、良く出きました！ それじゃ、改めてよろしくね健二くん」

「あ、ああ……」

岩泉先生もとい瞳の指示となれば仕方がない。俺は敬語をやめ、彼女と接することにした。

成長

料理を食べ終え、食器を洗った後、瞳から部屋の掃除を手伝って欲しいと言われ、掃除をすることにした。

掃除するのは物置部屋である。物置部屋の中にはいくつもの本棚があり、たくさんの漫画や資料集などが置かれていた。

俺はコロコロで、本棚の隙間にある埃を取り除いていった。しかし、掃除中カサカサカサと動く黒い生き物を目の当たりにした。

「ひ……！」

俺は思わず悲鳴を上げそうになった。何を隠そう、俺は虫が苦手なのである。特にGは。

「ひ、瞳！　へる……ヘルヘルミー！」

俺が大声を出して、瞳に助けを求めた。しかし、奴はカサカサカサと更に俺に近づいてきた。

「ぎゃー……！」

怖くなった俺は思わず情けのない声を出してしまった。

「ヘルプミーね。どうしたの健二君」

「Gが……Gが出たんだよ！」

「G? 全くそれくらいで情けないなあ。東京で暮らすつていうのはGと同じ部活に入ることと同じなんだよ」

瞳はびつくりするような戯言を呟きながらリビングに戻り、ティツシユ箱を持つてきた。まさか、そんな貧弱な装備品で対抗する気か? 俺がGと出会ったなら、殺虫剤を用意し、軍手並びにマスク、そして作業着を着用する。

瞳は『シユ、シユ、シユ』と三枚のティツシユを取り出し、Gの上にあっさりと被せた。

しかも軍手も付けず、素手で! 素手で! (大事なことなので二回言いました)

そして、ぎゅつとGが入ったティツシユを掴み上げると、ギュツと握りしめた。

「これで奴は死んだ……」

「す、すごえや……」

瞳の勇ましい姿を目の当たりにし、パチパチパチと拍手した。瞳は気を良くしたのかドヤ顔を見せる。

「健二君もGの一匹や二匹、自分で駆除できるようになってね。仕事してれば普通に出てくるから」

「きやーーーーー」

その後、俺は全力で部屋を隈なく掃除した。Gが出てくるたび、瞳に対処してもらった。この部屋は俺が清潔に保つてみせる。全てはGから家を守るために！

掃除を終えた後、瞳から寝室へと案内された。その部屋は六畳ほどある部屋で布団や机、椅子が置かれていた。

「ここが健二くんの寝室だよ。仕事の時以外はここを好きに使ってもらって構わないから」

「分かった。明日は何時から仕事すればいい？」

「それじゃ、十時くらいからでもいい？ 後、朝ごはんとかお願いしたいんだけど」

「ああ、構わない。けど、明日は深夜にコンビニのバイト入ってるから十時くらいは上げらせてもらいたい」

コンビニのバイトのことを伝えると瞳はキョトンとした表情を見せた。

「え？ 健二くん、バイトしてるの？」

なんだ、千尋さん言ってなかったのか。特段、アシスタントと他のバイトの掛け持ちは珍しいことではない。連載していない漫画家志望者などはアシスタントだけで生活していくのは厳しいからだ。

「うん、そうだけど……もしかして千尋さんから何も聞いてない？」

「聞いてない。ねえ、良かったらコンビニのバイト辞めない？ 出来るだけ給料出すし、ネーム描く時間も増えると思うからどうかかな？」

確かに悪い条件ではない。漫画に係る時間を増やすことができるのは願ったり叶ったりである。

しかし、今のバイト先も結構気に入っていたりする。どうするか少し悩んだ。

「分かった。考えてみるよ」

「うん、よろしくね！」

その日はシャワーを浴びた後、少しネームを描いて眠りに落ちた。

「おはようございます」

「おはよう、健二くん」

明梨さんに挨拶すると、彼女は眩しい笑顔を見せながら挨拶を返してくれた。

「今日が最後のシフトだけど、頑張ろうね！」

「はい！」

瞳のところでアシスタントを始めてから早二ヶ月あまりが経過した。明梨さんと相談し、バイトを辞めることを決意した。

長く働いていただけに寂しいという思いも勿論あるが、明梨さんは俺がバイトを辞め

ることを快く承諾してくれた。

俺は感慨に耽りながらここでの最後のバイトをこなしていった。今日は月曜日であり、週刊少年ジョークの発売日でもある。

お客さんであるサラリーマンや学生が次々とジョークを買っていく。今週号の巻頭カラーは瞳……いや、岩泉先生の『桃仁少年』であった。

俺も再び連載を勝ち取り、他の連載作家と競いたい。その為にはこれまでに漫画と向き合う必要がある。

作業が終わった俺はバイトの制服から私服に着替える。今の時間は比較的空いており、明梨さんは陳列の作業をしていた。

「明梨さん……」

明梨さんに話しかけると、彼女は少し悲しげな表情をしながらも優しく微笑んでくれた。

「これで最後ね。健二くん、私期待してるから。健二くんが超売れっ子作家になることを」

超売れっ子作家か……期待されてとても嬉しい。だが、俺が目指すのはもつと上だ。

「はい。俺、絶対に日本一の漫画家になって見せますから！」

明梨さんに親指を突き立てた。我ながら高飛車な発言だと思っている。

だが、漫画家を志した時、そう心に誓ったのだ。結果が出ず、諦めようとも思ったがもう迷わない。

「うん、頑張つてね！」

こうしてバイトを辞めた俺はそのまま真っすぐ瞳の家……ではなんく、ファミレスへと向かった。

今日は千尋さんと打ち合わせの予定がある。ファミレスに入ると冷房の涼しい風が顔を撫でる。奥にいる千尋さんの姿が確認でき、席へと向かった。

「お待たせしました千尋さん」

「お疲れ様。健二くん」

千尋さんと向かい合わせになるように座る。

「それじゃ、早速だけどネーム見せてくれる？」

「はい」

俺は昨日、完成させたネームを千尋さんに渡した。

ネームというのは漫画を描くための設計図のようなものであり、原稿を描く前に担当の編集にネームを読んでもらうことになっている。

ネームを描かずにいきなり原稿から入る先生もいると聞いたことがあるが、これは例外中の例外だ。

ちなみに俺が今描いているのは読み切り用のネームである。

元々は連載用のネームを描いていたのだが、千尋さんから一度読み切りで試した方がいいと言われたため、読み切り用のネームを描くことになった。

読み切りに向けて俺が描いている漫画のタイトルは『エレメントドラゴン』であり、内容はというと、人を喰らう世界各地に生息するドラゴンを主人公が倒しに行くというもの。

シンプルな内容だけにどう読者を引き込んでいくかが鍵となる。

さらに読み切りということも意識して、無駄なところは省き、内容を濃くしていかなければならない。

真剣な表情でネームを読んでいた千尋さんであったが、読み終えたのか「ふー」と大きく息を吐き、ネームの三ページ目を俺に見せてきた。

「健二くん、読ませてもらったわ。まず、ここだけ主人公がドラゴンに両親を殺されたくだりをもう少し悲壮感が漂うよう、長く描いた方がいいわね」

早速、千尋さんがネームに関して指摘を始めた。俺は忘れないようしっかりとメモを取る。

「俺もそう思ったんですけど、ページ数を超えてしまつて。どこを削つたらいいでしょう?」

「そうね……十ページの修行シーン。ここを出来るだけ省きましょう。後、主人公が使う技の『炎帝の斬《エンペラーズラッシュ》』っていう名前、私は『焔帝剣《バーニングソード》』がいいと思うんだけど」

「いえ！ それはダメです。『炎帝の斬《エンペラーズラッシュ》』がいいです。それだけは譲れません！」

「そ、そう……まあ、そこまで言うならこれはこのままでいいわ」

このようなやり取りを繰り返して、ネームをより良いものに昇華させていった。

「岩泉先生のアシスタントはどう？」

打ち合わせの途中に千尋さんはアシスタントの仕事の様子を訊いてきた。

働き始めこそアシスタントが俺一人しかいないこともあり、作業量が多く大変であったが、最近はある程度余裕を持って仕事をこなすことができるようになってきた。

「そうか。それは良かった。実を言うとな。悪いとは思ってたんだ。岩泉先生の性別を隠していたことをね」

「自覚はあったんですね……」

最初はとて戸惑った。そりゃそうだ。いきなり女性と一緒に暮らすなんて言われたら誰だつて狼狽するだろう。

「うん。だけどね。どうしても健二くんには岩泉先生と一緒に暮らして欲しいと思って

たのよ」

「それは……どうしてですか？」

「あの子を間近で見たいけば、話作りが上手くなるんじゃないって思ってたね。気づいてないかも知れないけど、健二くん。アシスタントを始めてからこの二ヶ月の間に話作りが急激に上手くなってると思うわ」

「そう……ですかね」

確かに最近、ネーム作りが捗るなどは思っていた。自分では気が付かなかったが瞳と過ごしていく中で知らない内に力が付いているのかもしれない。

「だから、もつと自信を持って良いわよ。とりあえず、読み切りのネームはさつき言った通りに直して、自分なりに改良できるところがあれば改良してみてちょうだい」

「分かりました」

打ち合わせを終えた俺は瞳の家に戻ることにした。瞳から貰った合鍵で扉を開け、仕事場であるリビングに入る。

瞳は自分の部屋で寝ているのかりビングには誰もいなかった。すぐにでもネームの修正に取り掛かりたいところであるが、さつき買ってきた今週のジョークを読むことにした。

「やっぱり面白いな、ロボット・プラネット……」

複雑な設定ながらも読者の頭に入りやすいよう丁寧な描写に迫力溢れる人間と戦闘兵（アーマーズ）との戦いのシーン。

読んでいて心が熱くなる。さらにページを捲り、桃仁少年を読むことにした。

当然だが俺が描いた背景がジョークに載っている。自分の作品ではないとはいえ、やっぱりこうして本誌で見ると感動するものだな。

俺も早く連載したいと思った。桃仁少年を読んだ俺は次に『ギャンブル王 匠』という漫画を読んだ。

最近、連載が始まった漫画でジョークでは珍しいギャンブルを取り扱った漫画である。

漫画の内容はというと、親の借金によってヤクザに借金を取り立てられることになった主人公の氷川匠がお金を稼ぐべくギャンブルの世界に身を投じるという話だ。

ギャンブルを取り扱った作品は他の雑誌にもいくつか存在するが、この漫画は他のギャンブル漫画が霞んで見えてしまうほどの手に汗握る頭脳戦が展開され、読者を引き込むのである。

作者はなんと十八歳で、俺よりも年下である。ジョークには瞳といい、若い作家が活躍している。

パーティ

他の漫画も読んでいると、瞳がリピングにやってきた。すっぴんのジャージ姿で髪はボサボサである。色気の欠片もない。

「おはよう」

「おはよう………ってか、もうお昼過ぎだぞ?」

漫画家という職業柄、昼夜逆転するのは珍しいことではない。

俺もかつては生活リズムが大きく狂い、出来るだけ規則正しい生活を送るよう努めていた。

「もう、そんな時間か……健二くん、お腹減ったからなんか使ってくれない?」

「はいはい、ラーメンでもいいか?」

「任せる」

俺はキッチンに向かい、冷蔵庫にある食材でラーメンを作ることにした。ここに来てからというもの、料理技術も随分と向上したものである。

麺を茹で、チャーシューとモヤシを入れラーメンを完成させた。醤油スープの香ばしい匂いが漂い我ながらとても美味しそうである。

出来上がったラーメンを瞳の元へ持っていった。

「お待たせ」

「おお、すごく美味しそうだね」

瞳のテーブルにラーメンを置き、その場から離れようとした。

「あれ？ 健二くんは食べないの？」

「俺はさつき外で食べてきたからな」

俺は席に戻り、読みかけであったジョークを読むことにした。小さい頃から『イチピース』も読んでいるが相変わらずの面白さだ。あと五年くらいで終わってしまうとの噂だが、本当かどうかは微妙なところである。

「健二くん。わざわざジョーク買わなくても私のを渡すのに」

連載作家には発売日前に編集から本誌が渡される。当の俺も連載していた頃は編集から本誌をもらっていた。

「いいんだよ。買って読んだ方がワクワクがあるからな」

「ふーん、そんなもんかね」

なんだかんだ言っても読む前のワクワク感。これは今でも変わらない。

自分の好きな漫画の展開が今週はどうなっているのか妄想を膨らませながら買うのが堪らない。

「あ、そうだ。健二くん。千尋から今度の土曜日、ジョーク作家のパーティがあるって言われたんだけど一緒に来てくれない？」

「え？ パーティ？」

俺も一度だけ行ったことがあったのだが、ジョークでは新年会と評して豪華なパーティが行われる。しかし、それ以外では特にパーティを行われる機会はほとんどなかったはずだ。

「うん。今年、ジョークが五十周年みたいで、盛大なパーティをするみたい。千尋に訊いたら健二くんも連れて行っていいってさ」

パーティか……ジョークのパーティだからタダで美味しい料理を食べることができるところだが、連載していない俺が行っても惨めになるだけだろう。

「ってか、千尋さんパーティのこと打ち合わせの時何も言ってくれなかったよな。言えよ。」

「いや、俺は遠慮しておくよ」

「え？ なんで？」

瞳は心底心外そうな驚いたような声を上げる。どうしてそんなに俺に参加してほしいのだろうか。

「どうして……俺、連載してないしな。ネームも来週までに直さないといけないし」

案に行きたくない様子を瞳に見せる。できればこういうパーティーは連載が決まっただけから行きたい。

「カギリリス先生に会えるかもよ」

行く気がない俺であったが、瞳の言葉を訊いてハツとした。そうだった。五十周年パーティーと言えば、カギリリス先生も来る可能性が高い。

「マジか……本当に来るのか？」

「多分、来ると思うよ。それに漫画家だけじゃなくて、声優の人とかも来るし行こうよ！」

「そうか。けど……瞳、どうしてそんなに俺に付いてきて欲しいんだ？」

俺が理由を尋ねると、瞳は「そ、それは……」と言葉を詰まらせ、俯いた。

「し、知り合いの人がほとんどいないのはちよつと心もとないかなって……」

あーなるほどそういうことね。理解した。要するにボツチは嫌だということか。

「分かった。とりあえず俺も参加するから」

「ありがとう！」

こうして、あつという間にパーティーの日がやってきた。出迎えよう車が家の前にやってくるため、俺と瞳は下で車が到着するのを待っていた。

「やばい……なんか緊張してきた」

瞳は家にいるときはラフな格好をしているが、今日はしっかりとした服装をしていた。まあ、しっかりととは言ってもあくまで私服ではあるのだが。ちなみに俺も私服でる。

スーツのような堅苦しい服装で参加する先生はあまりいない。

やがて、家の前に大きな黒い車がやってきた。車の扉が自動で開く。

「お待たせしました。岩泉様。白河様。どうぞお乗りください」

運転者に乗車するよう促され、俺と瞳は後ろの座席に座る。十分くらいの間外の景色を眺めているうちにパーティ会場に到着した。

「到着いたしました。どうぞ足元にお気をつけください」

車に降りてパーティ会場である高級ホテルへと入る。パーティが行われるのは十一階の大宴会室。エレベーターで向かうと、すでに会場内は人で溢れかえっていた。

「うわ、たくさん人がいる……」

瞳は人の数の多さに圧倒されていた。

「そうだな。新年会の時よか人が多そうだ」

「お疲れ様。二人とも」

千尋さんが俺たちに話しかけてきた。千尋さんはネイビー色のスーツを着ていて、いかにも『デキる女』のような雰囲気醸し出している。

「お疲れ様です。千尋さん」

「健二くんが参加してくれて助かったわ」

「まあ、会ってみたい先生もいたので……打ち合わせの時、パーティーのこと教えてくれてもよかったですか」

「あははは。私もすっかり言うの忘れててねー」

全く。普段の仕事はちゃんとこなしてくれるのにたまにこういう風に抜けているところがある。

「千尋。パーティーは途中退室あり？」

「岩泉先生……せっかく来たのにそんなこと言わないの！」

やはり瞳はこのパーティーに乗り気ではないようだ。あからさまに行きたくなさそうなので、俺も理由を聞いてみたりしたのだが、「知らない人が多いから嫌だ」の一点張りであった。

「分かったよ……ちよつと私、トイレ行ってくる」

瞳は少し不機嫌そうな態度を示しながらトイレへと向かう。

「健二くん。あの子からパーティーに行きたくない理由とか聞いた？」

「ええ、まあ……知らない人が多いから嫌だって言っていましたけど違うんですか？」

「それもあるだろうけどね。実はあの子、前にある漫画家と付き合っていたのよね」

驚きの事実を知り、頭が真っ白になりそうであった。今、なんて言った？

「な、なんですって？」

「だからあの子、前に漫画家と付き合っていたのよ」

瞳の元カレ……全然そんな雰囲気を持っていなかったが付き合っていたことがあるのか。

いや……確かによく考えてみれば私生活こそあれだが可愛らしい容姿をしているし不思議ではないか。

だが、あれほど漫画に真摯に向き合っている姿を四六時中見ていると。とても恋愛に興味があるなど思えないように見えた。

「そうだったんですか……あの、相手が誰か訊いてもいいですか？」

すると、千尋さんは辺りを確認し、俺に近づいてきた。

「いい？ 他の人には言わないでよ。勿論、岩泉先生にもね」

「分かりました」

「岩泉先生が付き合っていたのはね『ギャンブル王 匠』を連載している郡山一志先生
よ」

それを訊いて、とても驚いたと同時にまあ妥当かもしれないと感じた。

年齢的にも二人は年が近い。

「郡山先生なんです。しかし、会うのが気まずいから岩泉先生は行きたくないってことなんですか？」

「そうね。郡山先生、結構束縛が激しかったみたいだね。漫画に専念したいっていう理由で別れたんだけど、別れた後もひっきりなしに連絡が来たみたいよ。あまりにしつこいみたいで一時はノイローゼ気味になっちゃって……」

「ストーリー化したってことですか？」

「簡単に言えばそうね」

なるほど。そりゃ確かに行きたくもなくなるな。だったら無理に連れてくる必要もないような気がするが。

「あの子には酷だと思ったけどね、今日はアニメ関係者もいるし、どうしても出してもらわなければならないのよ。アニメ化の話もチラホラ出てるしね」

俺の考えを汲み取ったのか、千尋さんは瞳を無理やり連れてきた理由を説明した。

それにしてもアニメ化か。すごいな。

「そうですか。そういえば、カギリリス先生って今日は来てるんですか？」

今日、パーティにやってきた一番の理由がカギリリス先生に挨拶することである。今すぐにでも挨拶に行きたいくらいだ。

「え？　来てないわよ」

なん……だと……わざわざネームを前倒して完成させたつてのにそりやないだろう。

「な、なんでですか!」

「なんでつて……その……もうすぐ赤ちゃんが生まれそうなみたいで」

「は?」

カギリリス先生が来ない理由が全く分からない。赤ちゃんつてなんだ?

「そういえば健二くんは知らなかったのよね。カギリリス先生、原作と作画を分けて作業する二人組の作家でね、しかも夫婦なのよ。もうすぐ赤ちゃんが生まれるそうよ。だから、今日はパーティどころじゃないみたい」

カギリリス先生……どこぞのバ○マン。の主人公のように二人組の漫画家だったのか。

「そうだったんですか。会えなくて残念です」

「まあ、また連載勝ち取って新年会で会うといいわ!」

「そうなるよう頑張ります……」

めちやくちや会いたかったのに。萎えるなあ。

「うん! それじゃ、私は準備に戻るから悪いけど適当に時間潰してて!」

千尋さんは再びパーティの準備へと戻った。

さてと、俺も知り合いの作家に挨拶するかな。新年会の時に挨拶した先生も今日は何

人か来ているはずだ。

郡山一志

「うお……」

会場を歩いていると俺は瞳と青年が話しているのを見掛け、俺は思わず柱の陰に身を隠した。

瞳と話している青年は銀髪で整った顔立ちをしており、歳はおそらく俺より一つか二つほど下くらいである。さつき、千尋さんが言っていた郡山先生だろうか。

「久々だな、瞳。元気にしてたか？ 俺、別れた後も色々と瞳のこと考えてたんだ」

話の内容からしてやはりこの青年は郡山先生で間違いないようだ。

「う、うん……そっか」

話しかけられた瞳はとても気まずそうな表情をしている。別れた理由からして気まづくなるのも無理はないが。

「俺、ずっと瞳に謝りたかったんだ！ すまない、お前を苦しめてしまった！」

郡山先生は瞳に対して深く頭を下げた。この態度を見れば確かに申し訳ないと思っ
ているというのが伝わってくる。

「う、ううん……気にしなくてもいいよ」

「ごめんな、本当に。あの……良かったら俺たちもう一度やりなおさないか？」

ダメだこの青年。瞳も案の定困った……いや、もはや怯えたような表情をしている。もう見てはいられない。

「え、えつとそんな……私は……」

「二人が話している時にすみません」

悪いとは思いつながら半ば強引に二人の会話に割り込んだ。

「なんだあんたは？　悪いが今、大事な話をしているところなんだ。後にしてくれないか？」

郡山先生は明らかに不機嫌そうに俺を睨んできた。

「悪いけどそういうわけにはいきません。俺は先生のところでアシスタントをしている白河健二つて言います。さつき、やり直さなかつて先生に言つてましたよね？　お二人の關係に首を突つ込む気はありませんが……先生は多忙なんです。恋愛する時間なんて今は到底ありませんよ」

「なんでアシスタント風情にそんなこと言われなきやいけないんだ。これは俺と瞳の問題なんだ。引つ込んでいてくれないか？」

予想通り郡山先生から反論された。この人からは確かに瞳が好きだったという思いが伝わってくる。

しかし、千尋さんの話や瞳への態度から察するに、愛情が強すぎてすれ違いが起きてしまったのだろう。

「ちよつと一志くん！ 健二くんにそんなひどいこと言わないで！ 健二くんは絵がとても上手いし、連載だつてしてたすごい人なんだから！」

アシスタント風情という言葉に怒りを覚えたのか、瞳が意義を唱えた。

「へえ……その人、連載していたのか。なんて漫画を連載してたんだ？」

「えつと、その……『白銀の爪』っていう漫画を」

俺が連載していた漫画のタイトルを述べると郡山先生は馬鹿にしたように薄ら笑いを浮かべる。

「あー、あのすぐに打ち切りになったやつね。絵は確かに上手いつて思ったけど、あんな中身のない漫画を描けるなんてある意味すごい才能だと思うよ」

「一志くん！ どうしてそんなひどいこと言うの！」

くそ、ここまであからさまに言われる流石にムカつくな。

言い返したい気持ちが強くなるが、俺はまだ結果を出していない。

「ひどいこと？ 事実を言ったただけだろう。この世界は完全実力主義。才能のない奴が生き残っていけるほど甘い世界じゃないんだよ。はつきり言つてあんな漫画しか描けないならプロアシを目指すか、作画担当になるしかないと思うが」

「それは聞き捨てならない言葉ですね」

横から凜と透き通る声が聞こえてきた。ツカツカとハイヒールと床がぶつかり合う音が周囲に響く。

この場に颯爽と現れたのは千尋さんであった。

「えつと、あんたは確か……瞳の担当だったか？」

「はい。そこにいる健二くんの担当でもありませんけどね。どうも郡山先生」

「どうも……それで、聞き捨てならない言葉ってなんのことだ？」

「さつき、郡山先生こう言いましたよね。『才能のない奴が生き残っていけるほど甘い世界じゃないんだよ』って。私もそう思います。いや……この世界は才能があったとしても、運が無くて生き残れないことだってざらにあります。」

「だけど、私は……健二くんがこの世界で生きていける作家だと思っっていますよ」

「本気でそう思ってるのかよ？ 確かに絵はジョークの中でもまあまあ上手い方だとは思うけど、内容がハッキリ言っただろゴミだろ」

『ゴミ』という単語が郡山先生の口から出た時、千尋さんの眉がピクツと動いた。

「まあ……健二くんが話を作るのがまだ不得意なところは認めざるを得ないところだと思ふ。けど健二くんは成長しています。泊まり込みで岩泉先生のとこで住み込みでアシスタントをしたおかげでね！」

「おいおいおい、ここでそんなこと言っちゃう？ バカじゃない？」

「案の定、郡山先生は大きく口を開け、パクパクさせていた。」

「なん……だと……今、なんて言った？」

「えー？ だから、健二くんは成長してるとて」

「これはわざとやっているな千尋さん。」

「千尋さんはたまにこういう意地悪をすることがある。多分、Sなのだろう。」

「ちっげーよ、その後だよ！ 住み込みでアシスタントしてるのか？ そいつが？」

「はい、そうですよ。アシスタントだけじゃないです。家事全般もやってくれています」

「ほ、本当なのか？ 瞳？」

「う、うん……」

瞳は戸惑った様子を見せながらも頷いた。郡山先生は肩をプルプルと震わせていた。

「まじかよ、ふざけんなよ！ 恋人でもないのに、泊まり込みでアシスタントさせるとか、集用社も落ちたもんだな」

「本人同士が合意しているなら私に止める権利はないですよ。それに、二人は上手くやっています」

「まあ、俺も元々泊まり込みでアシスタントすることは全く聞かされていなかったけどな。」

「てめえ……瞳に手を出してないだろうな？」

「は、はい……」

「瞳、本当か？」

「うん、健二くんはそんな軽い人じゃないよ」

「ならいいが……瞳、悪いことは言わない。泊まり込みでバイトさせるなんて真似はもうやめるんだ」

「えっと、その……」

瞳は反論の理由が上手く思いつかないのか、言葉を詰まらせた。俺が泊まり込みでアシスタントしたいというのも郡山先生に変な誤解を招く恐れがある。

「それは郡山先生、あなたではなく、岩泉先生が決める話ですよ。岩泉先生はどうしたいの？」

「わ、私は……」

瞳は一度顔を伏せた後、再び顔を上げ郡山先生を見つめる。

「私は健二くんにこれからも住み込みでアシスタントして欲しい！」

瞳は自分の思いを正直に郡山先生に伝えた。さすがにショックを隠しきれないのか、一志は顔を強張らせている。

「決まりね。それじゃ、健二くんこれからもアシスタントよろしくね」

千尋さんは満足そうにその場から立ち去ろうとした。しかし、

「待てよ、担当さん」

郡山先生に呼び止められ、足を止めた。

「何ででしょうか？」

「ちよつと勝負しないか？」

「勝負……ですか？」

「ああ。前に俺の担当から聞いたのを思い出した。確か健二先生の新作、十月発売のジョークで掲載されるんだろ？ 実は俺も読み切り作品を一つ発表するんだ。健二先生の作品が掲載される前の号でな。どうだ？ どっちの順位が上か勝負しないか？」

順位がどちらか上か勝負か……漫画とかであれば燃える展開だが、どう考えてもこつちが不利だし勝ったとして俺に何のメリットがあるというのか。

「勝負したとして……健二くんが負けたら？」

「健二先生を瞳のアシスタントから辞めさせる。別にアシスタントだし、代わりの人は見つけられるだろ？」

「私たちが勝ったら？」

「もう……瞳と関わるのはやめる」

「ちよ、ちよつと待つてよ！ そんな勝負おかしいよ！」

勝負の内容を聞いていた瞳が意義を唱えた。確かにおかしい話である。穩便に済ませることができたら穩便に済ませたい。

そう思っていた。しかし、一方でこんな気持ちもある。

俺の作品を『ゴミ』と言ってきたことを後悔させてやりたいと。

漫画を面白く作れないのは確かに作者の技量の問題だ。

これは揺るぎない真実。だが、俺にとつて自分が作り出した作品は自分の子供のような存在。

自分の作品をバカにされて黙っていられるほど、俺は大人ではない。

「健二くん、この勝負受けてくれるかしら？」

千尋さんが尋ねる。答えはもう決まりきっているが俺は人差し指を立てた。

「郡山先生、俺が勝った時の措置を一つ追加でお願いさせてもらってもいいですか？」

「なんだ？」

「俺が勝ったら俺の作品をゴミだと言ったこと……謝ってください」

俺が真顔で依頼すると、郡山先生は『フン』と鼻で笑った。

「ああ、いいぞ。負けたら土下座で謝ってやるよ」

「この自信のある態度。よっぽど自身があるようだ。これは絶対に負けてられない。

「それじゃ、ギスギスしたのはもうやめにして後はパーティを楽しみましょう！」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

郡山先生はその場から離れた。千尋さんも「それじゃまた」とだけ言い残し、会場の準備に戻っていった。

締め切り前

「け、健二くん……どうしてあんなこと……」

「すまない瞳。実はさつき、千尋さんから郡山先生のことを聞いてたんだ。余計なことをしたのなら謝るよ。もし、郡山先生のことはまだ好きだったなら俺がちゃんと謝ってくるよ」

「いや……正直迷惑していたから助かったよ」

やはり迷惑していたのか。俺たちは近くにあつた長椅子に座つた。

「その……どうして別れたか聞いてもいいか？ 千尋さんからは漫画に専念したいからって聞いたけど」

「うん。理由はそれで間違いじゃないよ。最初に会つたのは授賞式の時だね。お互い年が近かつたのも会つて、一緒に連絡先を交換して会つたりするようになったんだけど……会つてから二ヶ月後くらいに一志くんから告白してきたんだ」

「それで付き合い始めたのか？」

「いや、最初は断つただけだね、その後も付き合つて欲しいって何度も迫られて勢いに負けて付き合うことになって。けど……一志くん、すごい束縛が激しくてね。お互い連

載を抱えていたのに、週に一度は必ずデートするよう強要してきて、毎日必ず一時間は電話しないと気が済まないんだ」

こちら辺は千尋さんから聞いていたのと変わりなかった。郡山先生のことを擁護すると、週に一度のデートというのは毎日の電話を要求するのも年頃の男であれば特段おかしい話ではない。

もつとも、それは二人が連載を抱えていなければの話である。漫画家というのは何と云つても多忙な仕事である。

週刊連載であれば尚更だ。『週刊連載は休んじやダメなんだ！』つと言う漫画の主人公がいるものの、実際のところ週刊連載に耐えられず休む作家は結構いる。

「それに……一志くん、会うたびにその……やりたいって言ってきた。断っていたんだけど段々と一志くんのが怖くなって別れようって言ってきたんだ」

なるほど。郡山先生も年頃の男だし、そういうことに興味があるというのも分からないくはない。

この二人のケースのように付き合ったカップルの性行為に関する価値観のスレ違いで別れるというのもよくある話ではある。

「そうか。それで別れたのか？」

「うん。けど別れた後も連絡してきて、ある時は待ち伏せして来たりして、正直……本当

に怖かった。前の担当の人にき、このことを相談しても全然何もしてくれなかったんだけど、千尋が担当になってからは新しい引越し先を紹介してくれたり、色々一志くんから離れられるようにしてくれたんだ」

話から察するに郡山先生に非があると断言しても言いだろう。瞳のことが好きだと言うことに間違いはない。

だがこれは愛情というより……独占欲に近い。

「そんな体験して、よく俺を住み込みでアシスタントさせようと思ったな」

「こう見えてもね。私、今でも男性恐怖症なんだよ？ でも、千尋が『優しい人だから絶対に大丈夫！ 男性恐怖症から克服できるチャンスだよ』っていうもんだから信じたんだ」

千尋さん、そんな大事なことなんで話してくれなかったのだろうか。というか、俺信頼されすぎじゃないか。

「ねえ……健二くん。一っだけ約束してくれるかな？」

「え、なんだ？」

「さつき一志くんすることになった勝負だけど……絶対に勝ってね。私、健二くんこれからもアシスタントして欲しい」

勿論、俺は郡山先生に勝つつもりである。しかし、これだけは瞳に告げておかなければ

ばならない。

「勿論、勝つつもりだよ。けど、アシスタントについては連載が決まったらやめなくちゃならない。そのことだけは覚えておいて欲しい」

俺はずっとアシスタントしていくつもりなどない。さっき、一志がプロアシを目指すか作画担当になるしかないなどと言ってきたがどちらもゴメンである。

「あ、ううん……そうだよ。分かってるよ」

瞳は少しく答えると、彼女は『会場に戻るね』と言い、パーティ会場へと戻った。

一人長椅子に座っていた俺はゆっくりと立ち上がる。

「さてと、俺も戻るかな……」

その後、俺は知り合いの作家さんに挨拶し、パーティが始まると豪華な料理を楽しんだ。今だけはこのパーティを楽しむことにしよう。

そして、再び連載を勝ち取り、今度こそカギリリス先生に会うと心に決めた。

年明けの九月の中旬の深夜過ぎ。俺は必死になって作業を行っていた。読み切り作品の原稿の締め切りに追われているのである。

締め切りは明後日であるが、まだ手付かずのページがたくさん残っている。

連載しているわけではないため、アシスタントも手配されることなく、一人で黙々と

筆を動かしていた。

作業していると『コンコン』と扉からノック音が聞こえてきた。扉を開けると、コーヒーカップを手に持った瞳が立っていた。

「お疲れ様。中に入ってもいい?」

「ああ」

瞳が部屋の中に入る。ここ数日間、自分の原稿に専念するため、瞳に頼みアシスタントの仕事は休ませてもらっていた。

食事と風呂以外は基本的に部屋に引きこもり作業に没頭している。

「健二くんコーヒー淹れたんだけど飲む?」

「ああ、それじゃありがたういただきますよ」

瞳からコーヒーカップを受け取ると、椅子に座りブラックコーヒーを飲んだ。

目が冴えてきたような気がする。やはり眠い時はやはりこれに限るな。

「原稿は順調?」

瞳が原稿の進捗具合を尋ねる。正直言って順調とは言い難い。締め切りに間に合うか危ういものである。

しかし、例え間に合いそうになくても間に合わせるのがプロである。

「正直、順調とは言い難いな。けど、絶対に完成させる」

背景や登場人物の服装のデザインに時間を割いていたら思ったよりも時間が掛かってしまった。

さらに新年会の後、千尋さんに頼んで内容もさらに改良させてもらった。その所為もあり、作画に取れる時間が減ってしまった。

しかし、郡山先生と勝負している以上、作画の力を抜くことだけは絶対にしなくなかったのである。

「良かったらさ、私も手伝ってあげようか？」

「え？ でも……」

さすがにそれは申し訳なさすぎる。それに、今の俺が瞳にお返ししてあげられることなど何もない。

「遠慮しなくても良いよ。今週は締め切りに余裕があるし、それに……少しでも健二くんに力になりたいって思うんだ。結構感謝してるんだよ。健二くんには」

「そっか。それじゃ、ちよつとお願いしたい」

瞳にアシスタントをしてもらうことになった。普段は俺が瞳のアシスタントをしている為、なんだか新鮮な感じだ。

出来上がっているページにベタ塗りとトーンの貼り付け、背景の描き込みなどやってもらった。

俺はひたすら無心で作業を行う。漫画制作というのはこんな風に時間に追われながら行うことが日常茶判事である。

連載が始まれば今以上に過酷な生活が訪れるだろう。だが、それでもジョークに自分の漫画が載った時の感動を思い返せば何ということもない。

「ねえ、健二くん」

黙々と作業をしていた瞳が話しかけてきた。

「なんだ？」

「読み切りの原稿が終わったらさ……忙しい？」

読み切りの結果次第だが連載を狙える順位を取った場合、連載用のネームを描く必要がある。

「読み切りの結果次第だが……多分忙しくなるかな」

「そっか……読み切りの原稿終わったら少し……っていうか一日、いや二日間くらい時間ある？」

「ああ、それくらいなら」

「良かった。ちよつと付き合っただけで欲しい場所があるんだ」

「付き合っただけで欲しい場所？ どこなんだ？」

「遊園地とか映画とか色々。健二くんと一緒に観に行きたいな。私たち、一緒に住ん

でるけど、今まで一緒にどこかに出掛けたこととかなかったじゃん。連載になったら健二くんもこの家から出て行っちゃうんでしょ？ だからその前に付き合って欲しいんだけど、どうかな？」

瞳がこんな誘いをしてくるとはな。いつも漫画に真剣に向き合っている為、ちよつと驚いた。

「ああ、別に良いぞ」

「やった！ いい？ 絶対に付き合ってよね！」

「ああ」

こうして瞳の協力があつて無事、読み切り用の原稿を完成させることができた。自分から見ても今回の原稿はかなり自信がある。千尋さんにも良い原稿であると認めてもらうことができた。後は結果を待つだけだ。

好きいな漫画

千尋さんに原稿を渡してから約二週間が経過した。俺は瞳と共に仕事をしていた。しばらくの間、アシスタントの方を休んでいた為、こっちの方も精一杯やらなければならぬ。

それに、今週は出来るだけ早く仕事を終わらせる必要があった。日曜日に瞳と映画館と水族館を見に行く約束をしているからである。ちなみに遊園地は来週行く予定である。

作業中にインターホンの音が聞こえてきた。多分、千尋さんだろう。

俺は玄関に向かい、「扉を開けると案の定、千尋さんが外にいた。

「お疲れ様、健二くん。岩泉先生、中にいる？」

「はい、いますよ」

千尋さんと共に仕事場に戻る。瞳は千尋さんの姿を確認すると、すぐに「千尋、ネーム出来たから確認お願い」とネームを渡した。

「ありがとう。それじゃ、読ませてもらうわ。あ、その前にこれ渡しておくわね」

千尋さんは瞳に来週の月曜日発売のジョークの見本誌を渡した。

「ありがとう。ねえ、健二くん。先に読む？」

「うん。頼む」

俺は早速、見本誌を読ませてもらうことにした。いつもは見本誌を読まず普通に購入するのだが、今週号は別だ。

なぜならば、勝負相手である郡山先生の読み切り作品が掲載される号だからである。

俺は早速、郡山先生の作品を読むことにした。タイトル名は『電腦ゲーム ブラックルーム』——内容は脱出もので、罠だらけの部屋『ブラックルーム』に集められた男女六人がブラックルームからの脱出を目指すという内容である。

内容はかなり濃く、脱出する途中で話は終わっているが読み切りとしてかなり綺麗に纏まっている。

「面白いな……」

思わず呟いた。郡山先生特有の主人公が頭脳を駆使して危機を乗り切るシーン、途中で出くわす謎の怪物との戦闘シーン。

個人的には郡山先生が連載している『ギャンブル王 匠』よりも面白いと思った。

これが連載されればかなり人気が出るのではないだろうか。もつとも、少しジョーク向きではないとも感じたが。

『電腦ゲーム ブラックルーム』を読み終えた後、他の漫画を読んだ。カギリリス先生

の『ロボット・プラネット』は相変わらず面白い。

そういうばもうすぐ出産ということで、パーティには来ていなかったが、休載してないな。

あらかじめ書き溜めておいているのだろうか。だとしたらかなりの速筆である。

イチピースも人気があるが、やはり気滅の剣は今一番勢いがある。

そろそろ、物語も終盤という感じがするがこの人気から察するに編集部はまだ連載を続けてもらおうと画策するかもしれないな。

終わらせたいところで終わることができない——打ち切りも辛い人気作品に取ってはそれも辛いところである。

まあ、今の俺には縁の無い話か。一通り読み終わるとジョークをテーブルに置き、俺は再び作業に戻った。

「健二くん、一志くんの漫画……どうだった？」

千尋さんとの打ち合わせを終えた瞳が郡山先生の作品の感想を訊いてきた。

「面白かったよ」

俺は正直に漫画の感想告げた。だが、俺が描いた漫画も負けているとは決して思っていない。

「そっか……健二くん、勝てそう」

「どうか……瞳も読んでみたらどうだ？」

「うん、そうだね」

瞳はジョークを手に持ち、早速『電腦ゲーム ブラックルーム』を読み始めた。

瞳はとても真剣な表情で漫画を読んでいる。

俺は瞳の漫画に向き合う姿勢を心から尊敬している。

普段の私生活はダラシないが、漫画になるとともかくひたむきに向き合うのである。

「うん、やっぱり一志くんの漫画は面白いね」

「ああ、そうだろうな」

すると、椅子に座っていた千尋さんが急に立ち上がった。

「健二くん、確かに郡山先生の漫画は面白いと思う。けどね……私は健二くんの漫画も負けていないと思うわ」

「うん、私もそう思うよ。健二くんの漫画なら絶対に勝てるよ」

二人にそう言ってもらえてとても心強い。しかし、結果など結局のところ蓋を開けてみるまで分からない。

「私が全力でサポートしたからね！ もしダメだったら私を罵ってくれてもいいわ！」

千尋さんは握りこぶしを作り、『ドン』と自身の豊満な胸を叩いた。衝撃を受けた胸は『プルン』と大きく振動する。

頼もしいが罵っていいというのはな……てつきりSだと思っていたが本当はMだったりするのだろうか。

「そんなことしませんよ……結果が出ないのは作者の責任……そうでしょう?」

作品を作る以上、結果の責任は全て作者が負わなければならない。少なくとも俺はそう考えている。

結果が出ないのを編集者のせいにする作者もいるが、そんな考えでは決して上に行くことができない。

とができない。

当の俺も最初打ち切りになった時は編集の言う通りにしていたせいだと思いついていたのだが。

「まあね……けど、健二くん。編集に頼るというのも作者にとって必要なことなのよ。それを忘れないでね」

「分かりました」

明梨さんは部屋から出ていった。さてと、仕事を再開するか。瞳から指定を受けたコマに背景を書き込む。自分で言うのもなんだがアシスタントを始めてから、背景を描くのもだいぶ上手くなった気がする。もっとも、もし自分が連載になったら、背景はアシスタントに任せることになるが、背景を描くのが上手くなって不都合はない。

集中して作業に取り組んでいるとあっという間に日が暮れた。

「もう、こんな時間か。健二くん、今日はもう終わりでいいよ」

「分かった。それじゃ、夕食を作る。何か食べたいものはあるか？」

「えーと、そうだね。魚料理を食べたい気分かな」

魚料理か。確か冷蔵庫に鮭が入っていたはずだ。

「分かった。それじゃ、鮭で適当に何か作る」

台所に向かい、料理を始める。鮭をフライパンで炒めて、塩とニンニクを掛ける。

料理を開始してから三十分ほどで二人分の料理が出来上がった。作った料理は鮭のムニエルである。

「お待たせ」

完成した料理をリビングに持っていった。

「おお、美味しそうだね」

料理を見た瞳は目を輝かせた。

「そうだろ。早速食べようか」

夕食を瞳とともに食べることにした。俺が作った料理を瞳は美味しそうに食べている。

「ねえ、健二くん。ジョーク以外で好きな漫画ってある？」

「ジョーク以外でか？ そりゃああるけど……」

「どんな漫画が好きか教えてくれる？」

俺はどんな漫画を挙げるべきか少し悩んだ。候補がたくさんありすぎて絞り込むことが難しい。

「そうだな……たくさんあるが、強いて挙げるとしたら『リコリスアイランド』とかかな」俺はかつて夢中になって読んでいた漫画の一つを挙げた。

『リコリスアイランド』とは週刊ヤングマーガレットという雑誌で連載されている漫画であり、内容は主人公がウイルスに感染し、吸血鬼と戦うというもののだが、登場人物の独特のセリフの言い回し、要所所で活躍する丸太、シリアスな笑い、迫力の戦闘シーンが見どころでカルト的な人気がある。

何より主人公の小宮晃さんがめっちゃくちゃ強い。

「ああ、あの丸太が活躍する漫画ね」

「ま、まあな……」

瞳はリコリスアイランドを丸太が活躍する漫画で覚えていたようである。確かにそれは間違っていないのだが、この漫画の魅力はそれだけではない。

「瞳は？ ジョーク以外の作品だと何か好きなのはあるのか？」

何気に今まで訊いたことがなかったが、興味はある。

「そうだね……ジョーク以外だと、『鋼鉄の錬金術師』とか好きかな」

「鋼鉄の錬金術師か。あれも面白いよな」

俺も連載していた当時、読んでいたが最終回までの展開は本当に手に汗を握るものであった。

「うん。後は『追撃のジャイアント』とか『黄金色のダッシュユベル』も好きだよ！」

挙げてきたのはやはりどれもバトル漫画である。瞳の作風の当然と言えば当然か。

「やっぱりバトル漫画が好きなんだな。バトル漫画以外で好きなのはいいのか？」

「そうだね……バトル漫画以外だとミステリーとかスポコンものとか読んだりするよ」

「へえ、そうなのか」

個人的にはミステリー漫画は頭を使うため読むのが苦手である。例えば『迷探偵カナン』を小さい頃読んでいて犯人を推理したことがあるのだが、一度も当たったことはない。

「うん。実は今、次回作のことを考えててね」

「次回作？」

確かに『桃仁少年』の展開はそろそろ佳境に入っていると感じていたがもう次回作のことを考えていたのか。

「そろそろ『桃仁少年』を終わらせようと思っててね。だから、次は何を描こうかなって

考えてたんだ」

「それでジョーク以外の好きな漫画を訊いたのか」

「参考までにね。ジョークだとバトル漫画が人気だけど、あえて別のジャンルに挑戦したいと思うんだ」

ジョークでバトル漫画以外の漫画で挑戦か。実際のところそれは難しい問題である。バトル漫画以外でヒット作を出すのは前例がないわけではないが、かなり稀なケースである。

「バトル漫画以外でか……」

「難しいことだとは分かっているよ。けどね、挑戦したいんだ」

意思是硬いようである。『桃仁少年』の人気なら今の章が終わっても続きを書くことができるだろう。それでもな次回作を考えているということは新しい漫画を描きたいということか。

「そうか。俺がバトル漫画以外で好きな漫画を挙げるとすれば、『遊んで遊んで遊びまくれ!』っていう漫画かな」

漫画のタイトル名を挙げると瞳はキョトンとした顔をした。

「ふーん、聞いたことのないな」

「そうか……週刊少年マーガレットで連載されていた漫画なんだが、ジャンルの日は日

常漫画に当たるのかな。とにかく絵が上手い漫画なんだ」

可愛らしいキャラクターたちが登場し、良い意味で何も中身の無い内容である。読んでいると和やかな気持ちになるのだが、人気がなかったのか結構早く完結してしまった。

「へー、そうなんだ。あ、そうだ。日曜日のこと、忘れてないよね?」

日曜日のことというのは勿論、映画館と水族館のことを指している。

「ああ。映画と水族館のことだろう?」

「うん! あー、すっごい楽しみなあ」

ちなみに映画は『オタクに恋愛は向いていない』を見に行く予定である。原作は漫画であり、内容はタイトル通りラブコメものである。

映画を観に行くに当たって俺は原作を読んでおいていた。登場人物のほとんどがアニメ知識が深いという設定であり、アニメのパロディネタがちよくちよく挟まれていて面白いと思った。

「そうだな。そのためにも今週の仕事を早めに終わらせないと」

「うん! そうだね」

水族館

そうしてアシスタントの仕事をしているとあつという間に約束の日である日曜日が訪れた。

「それじゃ行こうか」

「ああ」

俺と瞳は家から出た。今日はお出掛けのため、いつもは家でジャージ姿の瞳も今日はしっかりとした服を着ている……といっても、青色のTシャツに黒色のズボンというややラフな格好ではあるが。

天気は晴天であり、暑い日差しが照りつけ、嫌が応にも夏であることを感じさせる。徒歩三分ほどで最寄駅に到着し、そこから電車で池袋へと向かう。

池袋駅に到着すると、東口からサンシャイン池袋へと向かう。

サンシャイン池袋に到着すると、早速映画を見るためグランドシネマサンシャインの中に入った。

日曜日のためか、チケット購入機にはそこそこの人が並んでいた。購入機から早速、チケットを購入した。

「健二くん。ポップコーンも買わない？」

「ああ、そうだな」

俺は映画を見るとき、何も買わずに入るタイプであるが、せっかくだし購入することにした。

映画開始時間のギリギリになってしまったが、幸いにもスクリーンには別の映画予告が映し出されている。

「良かった、まだ映画始まってないね」

俺たちはチケットに書かれている席に座った。劇場内はほぼ満席であった。俺はポーとスクリーンを眺めた。

今スクリーンに映し出されている映画の予告は『迷探偵カナン』である。カナンは毎年映画が公開される。と言っても、俺は今まで一度もカナンの映画を観に行ったことはない。

「犯人は望里三郎（もうりさぶろう）」

ボソツと瞳が何かを呟いた。

「はっ？」

「い、いや……なんでもないよ」

元ネタは分かる。面白いよなあのネタ。俺は口には出さず、胸の中に留めておいた。

ようやく長い映画の予告が終わると本編である『オタクに恋愛は向いていない』が始まった。

俺は集中して映画を見た。漫画家になってから映画のような創作物は純粋に楽しんで観るだけではなく、自分の作品に活かせないかという観点からも観てしまう。

漫画を描くのは楽しいが、こういった現象が起きてしまうのは漫画家として避けられないことである。

そして映画の内容はというと、かなり面白かった。まず、キャスト陣の演技が軒並みに高いと思った。ストーリーも原作に概ね忠実に再現しており、原作にはないところもまた、引き込まれる内容である。

何より、主人公とヒロインがコミックエチケットに参加するシーンがあるが、コミックエチケットの様子がリアルに映し出されていて、すごいと感じた。

映画が終わり、俺と瞳は劇場を後にする。時刻はちょうどお昼時のため、俺たちはサンシャイン池袋内にあるレストランに入った。

「いやー、面白かったね。健二くん」

瞳は満足そうに呟いた。瞳の目の前には先ほど頼んだチーズハンバーグが置かれている。ちなみに俺はエビグラントンを注文しているが、まだ運ばれてきていない。

「そうだな。カメラワークといい、効果音といい、緻密に計算されて作られていた」

「え、健二くん。そんなところまで観てたの?」

瞳は明らかにドン引きしたようで、少しシヨックである。

「いやあ……漫画を作る仕事をしていると映画とかそういう創作物ってそういう視点で観たりしないか?」

かの有名な『狩人×狩人』の作者、明石先生も面白くない面白くない映画を見て、ストリー作りの研究をしたっていうエピソードがあるくらいだ。

「あー、まあそういう先生も確かにいるけど、私は普通に楽しんでみるかな!」

瞳はあっけらかんとした様子で答えた。特に意識しなくてもあんな面白いストーリーが思いつくのだから才能とは実に残酷で無慈悲であると痛感される。

「そ、そうか……なあ瞳って高校は通ってないんだよな。連載が決まって中退したのか?」

かつて俺も連載するにあたって漫画に専念するために高校を中退したことがある。

あっさり打ち切りになってしまったが……まあ後悔はしていない。

「いや、元から通ってなかったよ」

「え、そうなのか?」

「うん。中学校を卒業した後にすぐにアシスタント入りして、一年後くらいに連載を始めただ」

「はー、そうなのか。親は反対しなかったのか？」

俺はめちやくちや反対されたが、何とか認めてもらったという状態である。

「うん。私、親いないし」

瞳は無表情で衝撃の事実を述べた。

「あ、えっと、その……」

何を言うべきか模索しているとウェイターがやってきて「こちらミートスパゲティです」とテーブルに俺が注文していた料理を置いた。

「料理来たし食べようか」

「え……あ、ああ。そうだなー」

俺たちは料理を食べることにした。食べ終わると会計を済ませレストランを後にし、サンシャイン水族館に向かう。

水族館の中には大小様々な水槽及び水生生物があり、普段あまり水族館に来ることがない自分にとって、とても心惹かれた。

「はー、すごいなこのオオグソクムシ」

瞳がやや小さめの水槽に入っているオオグソクムシを見て、感心したように呟く。

水槽の前にはオオグソクムシの説明が書いている看板があった。見た目、ダンゴムシのような少し気持ち悪いこの生き物には約三千五百個の複眼があるらしい。

さらに『深海の掃除屋』と呼ばれているようで、深海底に沈んできた大型魚類やクジラなどの死骸を食べているそうだ。

しかし、なんとこのオオグソクムシ、驚くことに地域によつては食用として活用されているらしい。とても食べれそうに思えない。

「た、食べれるのか……この生き物」

「本当、驚きだよ。見かけによらず案外美味しそうじゃない？」

「いやあ……どうだろうな。見た目虫っぽいし」

「でもさ、蟹もちよつと虫っぽいけど美味しいじゃん」

蟹か。言われて見れば虫っぽいような気もするがそんなことは言わないで欲しい。今後、食べれなくなりそうだ。

「しかし、かっこいいなーこの生き物」

「瞳はこういう生き物が好きなのか？」

「うん！ 私、王蟲とか虫をモチーフにしたクリーチャー、好きなんだよね！ ちよつとこのオオグソクムシ、写真撮っておこうつと！」

瞳は意気揚々とオオグソクムシをスマホで撮影した。写真を取り終わると別の水槽に移動する。

ゆつたりと神秘的に揺れるクラゲの水槽の前に立ち、クラゲの様子をじっくりと鑑賞

した。

「健二くん、クラゲ好きなの？」

「別に特別好きというわけでもないが嫌いでもないかな」

小さい時、俺はクラゲがなぜか苦手であったが、今は普通に楽しんで観れる。

「ふーん、そつか。ねえ、水族館にいる生き物の中で何が一番好き？」

唐突に出された質問に答えを詰まらせる。一番好きなものか……

「やっぱあれかな。エイかな」

「へー、なんで？」

「あの裏側の笑ったような顔が結構好きなんだ」

「そうなんだ、変わってるね」

変わってるのか。大抵の人間が好きだと思っていた。

「そんじや瞳は何が一番好きなんだ？」

「そうだね……アザラシかな」

「そうなのか。どうしてだ？」

「可愛いじゃん」

「……思ったより普通の理由だな。ちよつと意外だ」

もつとスペックが高いからとかそんな理由を期待していた。すると、瞳は俺の脇腹を

小突いできた。

「ひどいな、もう。私だって普通の女の子なんだからね！」

瞳は早足で別の水槽へと向かう。どうやら少し怒らせてしまったようである。

先を歩いていた瞳であったが、ある水槽の前に止まった。それはダイバーが泳いでいる水槽。水中マイクを片手にダイバーが魚の説明をしていた。

「ご覧ください！ こちらはニホンウナギです！」

ダイバーの手の先には全長一メートルほどの長さを誇るウナギがいた。

「こちらのニホンウナギは二十三年から絶滅危惧種に指定されております。水質汚染による環境変化が受けやすく、餌を取ることができなくなることでウナギ個体数そのものが減ってしまうのが絶滅危惧種の説明です」

「うーん、なんか難しいこと言ってるね」

神妙な面持ちで説明を聞いていた瞳が頭を抱えだした。

「そ、そうだな……」

俺も要するにウナギが危ないということくらいしか分からない。所詮、高校中退の学歴などこの程度である。

「また、実はウナギには毒があります。ウナギの血が毒に当たりますが熱に非常に弱いので、食べる分には問題ありません。ウナギの血の致死量は一リットルになります」

「毒……知らなかった。ウナギって毒があつたんだ！　ねえ、健二くんすごいと思わない？」

瞳は嬉しそうに目を輝かせた。一体、何をそんなに感激しているのかさっぱり分からない。

「さっきの説明でなんか面白いことがあつたのか？」

「だって、ウナギに毒だよ！　これ、漫画で活かせないかな？」

「ウナギの毒をか……さすがに厳しいんじゃないか？」

少なくとも俺はウナギの毒で何かするなんて到底思いつかない。

「例えばさ……ミステリー漫画を描くときに犯人に殺人でウナギの毒を使わせるとか」

瞳はとても真剣な表情で驚愕の殺人方法を編み出した。

「いや、無理だろ。致死量一リットルだぞ？　どんな方法で飲ませるっていうんだ？」

「身体を縛り付けて強引に飲ませるとか？」

「おいおい、そいつ死ぬわ。なかなかエグい方法を思いつくな。」

「普通に致死性の毒で殺した方が早いよな？」

「う……ま、まあきつと何かの役には立つよ」

しかし、得た知識を何でも漫画に結びつけようとする姿勢は確かに重要である。俺も少しは見習うか。

次に俺たちはペンギンの水槽へと向かった。陸でよちよちと可愛らしく歩いているペンギンも入れば、水中で素早く泳いでいるペンギンもいる。

「ペンギン、可愛いなー」

瞳は普通の女の子のような表情でペンギンを見つめた。こんな瞳を見ているとふと妹のことを思い出し出てくる。

ペンギンを鑑賞していた瞳が俺の方を向いた。

「健二くん、どうかしたの？」

「あ、いや……ちよつと妹のことを思い出してな。あいつもペンギンが好きだったんだ」
妹はよくペンギンのグッズを集めていた。さらに『友達どうぶつ』というアニメに出てくるペンギンを擬人化したキャラクター、『王様ペンギン』をこよなく愛していた。

「へー！ 健二くん、妹がいたんだね。何歳なの？」

「俺の三つ下で今、高校一年生だ」

「どんな妹さん？」

「そうだな……」

妹の白河菜緒（しらかわなお）とは小さい頃から仲良く過ごしていた。もちろん、たまに喧嘩することもあったものの、兄妹関係は比較的良好だったと言ってもいいだろう。

高校を中退した俺と違い、成績も優秀で都内の進学校に通っている。しかし、俺が連載するにあたって家を出てからはまるつきり会っていない。

菜緒からちよくちよく連絡は来るものの、連載があつさりと打ち切りになってしまったため、なんだか会いづらいのである。連載が決まったら菜緒とは再び会いに行くつもりではいる。

「まあ、普通の妹だよ。ちよつと瞳に似てるかもな」

「そうなんだ。写真とかないの？ 健二くんに顔似てる？」

「悪いが写真はないな。顔は……俺とはあんまり似てないんじゃないか？」

知人や親戚からは俺と菜緒が似ていると言われたことはほとんどない。

「そっか。一度見てみたいな」

「もしも会う機会があつたら相談してやるよ」

俺は冗談交じりにそう瞳に告げた。

「うん、約束ね！」

しかし、これが意外な形で果たされることになる。

館内を一通り見終えた俺たちは水族館から出た。滞在時間は二時間ほど。

時刻は午後三時を回っていた。

トリックアート

館内を一通り見終えた俺たちは水族館から出た。滞在時間は二時間ほど。

時刻は午後三時を回っていた。

「水族館も見終えたし、どこか別の場所に行く？」

「そうだな。なあ、ちよつと遠いけどお台場の方に行ってもいいか？ 東京トリック

アート迷宮館に行ってみたいんだが……」

「うん、私も行ってみたい！」

池袋から電車に乗り継いで新馬駅に行き、さらに新橋駅からゆりかもめ線でお台場に向かう。

東京トリックアート迷宮館にはたくさんトリックアートが展示されている。

トリックアートとは、人間の錯覚を利用することで立体的に見えたり、見る角度によつて異なった印象を与えるといった不思議な感覚を味わえるアートである。

チケットを購入した俺たちは早速、迷宮館の中へと足を踏み入れた。

入館して最初にあったのは江戸エリアである。通路の右側にピンクの着物の女性が描かれている。最初は普通のサイズに見えたが、少し歩くと、

「うわ！　すごい！」

真横から見るとビヨンと伸びて描かれているのが分かった。さすがトリックアート。よく出来ているな。

少し歩くと写真を撮れるコーナーがあった。茶屋に座っているようになって、立体的に見える赤い椅子、背を向けて座っている人、立って接客している女性と全て壁に絵として描かれている。

「せっかくだし、写真撮ろうよ！　健二くん」

「そ、そうだな」

俺は壁にもたれかかり空気椅子をし、絵の壁に写っているように演じた。瞳が欠かさずパシャッと写真を撮る。

「健二くん、私も撮ってくれない？」

「ああ、いいぞ」

俺は瞳を撮影した。撮影を終えた俺たちはその後も様々なトリックアートを堪能した。

「す、すごい！　見る位置を変えると景色が動くよ！」

壁に描かれている建物の絵。同じ絵なものにも関わらず見る位置を変えることで景色が揺れ動くようであった。

「確かにすごいな」

絵に近づくとは仕組みが分かった。平面じゃなくギザギザの壁に絵が描かれているのである。

「なんか、こういうギミックってワクワクするね！ これも漫画で使えないかな」

「トリックアートを駆使して戦う敵とかか？」

「うん、いいと思う！ なんかドンドンアイデアが溢れてくるよ！」

漫画のことを考えている瞳は本当に輝いている。さらに俺達は忍者屋敷のコーナーへと進んでいく。

「うわ！ びっくりした……」

瞳は壁に描かれている絵を見ると驚きの声を出した。壁には床下から忍者が現れる絵が描かれている。

「これも写真撮影用だな」

瞳は床に寝転びだした。「撮って」と言わんばかりに見つめられ、俺は反射的にスマホを取り出した。

「それじゃ、撮るぞ」

スマホを横にして撮影する。撮った写真を確認すると、瞳が忍者にびっくりして驚いているように見える。実際のところは寝転んでいるのだが。

江戸エリアを見て回った後、『怖くないお化け屋敷』エリアへと進んだ。外に出たがらない様子の『からかさ小僧』、口から炎を出しながら襲いかかる『片輪車』、幽霊に肩を持たれているように撮影できるスペースなどがあつた。

「いやー、いろんな妖怪がいて面白いね」

「確かに、これも漫画の参考になりそうだな」

漫画やラノベで妖怪が出てくる作品は星の数ほどある。逆に言えばそれだけ題材にされているため、題材にするのが難しいとも言えるのだが。

「うん！ 次回作に妖怪出して見ようかなー」

「妖怪ってことはやっぱり次回作もバトル漫画にするのか？」

以前、瞳は次回作について、バトル漫画以外に挑戦すると言っていた。妖怪と言えば俺の中でバトル漫画のイメージが強い。

「いやあ、別に妖怪⇨バトル漫画ってわけでもないでしょ？」

「俺の中では妖怪⇨バトル漫画なんだよな」

「あ、そうなんだ。例えばさ、『悠々白書』……」

瞳が上げた漫画のタイトル、ガッツリバトル漫画だと思ふのだが。

「最初の方の幽霊探偵編、私すっごい好きだったんだよね。ああいうの描けたらいいな」
確かに悠々白書も最初の方はバトル漫画というよりは主人公が異能を使って問題を

解決していくという話であった。

しかし、週刊少年ジヨークの宿命か段々とバトル漫画へとシフトしていったが。

「幽霊探偵編面白いよな。俺も好きだった」

「でしよー!」

怖くないお化け屋敷エリアが終わると、『名作エリア』に入る。ここでも面白いトリックアートが続々と出てきた。

飛び出しシロクマ、飛び出すゴリラ、飛び出すペンギンといったトリックアートが展示されている。

「うわあ、ペンギンだ!」

飛び出すペンギンのトリックアートを見て、瞳のテンションが上がるのが分かった。本当ペンギン好きだな。

しかし、先ほど上げたトリックアートよりもさらに興味を唆られるものがあった。

「す、すごいなこれ……」

そのトリックアートを見て唾然とした。それは壁に大きなサメが描かれたトリックアート。とても迫力がある絵である。

「瞳、ちよつと写真撮ってくれ」

「了解」

俺は地面に寝そべり、サメの口元に手を伸ばした。

「はい、チーズ」

瞳が写真を撮った。写真を確認すると今まさに俺がサメに喰われようとしていた。

名作エリアの最後に描かれていたのはドラキュラがワイングラスを手に持っているトリックアート。

瞳はワイングラスの部分にしゃがみ込み、ワイングラスの中に閉じ込められているような演技をした。

「さあ、健二くん。写真撮って！」

「ああ」

ドラキュラによって、ワイングラスに閉じ込められてしまった瞳を撮影する。

「健二くんも撮って上げるよ」

「ああ、頼む」

俺も写真を撮ってもらった。館内をすっかりと堪能した俺たちは満足感に浸りながら迷宮館を後にした。

「いやあ、すっごい楽しかったね」

「そうだな」

迷宮館をじっくりと時間を掛けて堪能したため、すっかりと日が暮れていた。外を歩

いていると自由の女神像がライトアップされているのが見えた。

俺たちは女神像に近づき、青・白・赤と次々に色を変えながらライトアップされる女神像を鑑賞する。

「女神像、綺麗だね」

「そうだな。けど……」

なんとというか神々しい。見てみると心が浄化されていくようである。

「ん？」

ふと周りを見ると、カップルだらけである。なんだか場違い感を感じた。

「い、いやなんでもない。なあ、瞳。ここでご飯を食べていけないか？」

「そうだね。そうしよう」

俺たちはアクアシティにあるレストランの中へと入った。案内されたのは窓側の席で、窓からレインボーブリッジと東京の夜景を眺望することができた。

ウェイターから渡されたメニュー表を開き、しばらくの間何を注文するか考えた。

「健二くん、料理決まった？」

「ああ、瞳も決まったか？」

「うん」

ウェイターを呼び、料理を注文する。俺は野菜のピクルスときのこのガーリックライ

スを注文し、瞳はガーリックポテトサラダとチキンローストを注文した。

「健二くん、お酒は頼まないの？」

「頼まないのって……俺、まだ二十歳になってないし」

「ああ、そういえばそうだったね。私も早くお酒飲めるようになりたいなー」

瞳がお酒か。顔がやや童顔のため、確実に年齢確認を求められるような気がする。

「いやー、しかし夜景綺麗だね」

「そうだな。久々に仕事のリフレッシュできた感じだ」

まるで宝石のように都会の喧騒混じって輝く光の数々は見ていると日々のストレスや疲れが消えていきそうさ。

裏を返せば夜景の数だけたくさんの人が仕事をしているということでもあるのだがそんなことは気にしない。

やがて、料理が運ばれてきた。まず、前菜である野菜のピクルスとガーリックポテトサラダがテーブルの上に置かれる。

野菜のピクルスを食べてみたが、酸味が効いており歯ごたえが良くとても美味しかった。

「それ、美味しい？」

「うん、そうだな」

「ちよつと貰つてもいいかな？」

「ああ」

俺が承諾すると、瞳は野菜のピクルスを箸で一口摘み、咀嚼した。

「うん、美味しいね。私のも良かったらもらおう？」

「ああ。それじゃ、ありがたく」

俺はガーリックポテトサラダを一口食べた。

「おお、美味しいな……」

ポテトがホクホクと柔らかく、味加減が絶妙である。自分で作るポテトサラダよりも遥かに美味しい。

「だよね！」

「ああ、俺が作るポテトサラダより上手い……って、プロの料理と比べるなんておこがましいか」

「そんなことないよ」

凜と透き通るような瞳の声が鼓膜を通り抜ける。少しびっくりした。

「え？」

「確かにね、この料理もすごく美味しいけど、健二くんが作ってくれた料理が私は一番好きだよ」

聞いてて恥ずかしくなるようなことをサラリと瞳に言われ、なんだかむず痒い気持ちになる。

「そ、そうか。ありがとう」

「できるなら……私は健二くんの料理をこれからもずっと食べてたいな」

「お、おい……なんだそのプロポーズみたいな言葉は」

「なーんてね！　ちよつとき、ラブコメ漫画描く用のセリフを考えてみたんだ。どう？

ちよつとはキュンってきた？」

「こ、こねーよー！」

いたずらっぽく微笑む瞳。だが、そんな瞳の笑顔を見て俺は安心する。

パーティー会場で郡山先生と会った時は辛そうな表情をしていたが今は大分楽しそう
だ。

すると、瞳は俺の手の上に自分の手を重ねてきた。

「ねえ、健二くん」

「ど、どうした？」

瞳の肌の感触を感じて、胸がなんだか締め付けられるようであった。

「一志くんとの勝負、絶対に勝ってね」

妹来襲

瞳とお出かけしてから二日経過し、俺と瞳は無言のまま仕事をしていた。仕事場には只ならぬ緊張感が漂っていた。というのも、本日はジョークの順位が発表される日なのである。

瞳は毎週、順位をドキドキしながら待っているが今回はそれだけではない。

今週号は郡山先生の漫画が掲載されている号である。一体、郡山先生の漫画は何位なのだろうか、俺もソワソワしてしまふ。

すると、プルルと瞳のスマホから着信音が鳴り響いた。

「もしもし、うん。そっか。分かった。健二くんにもそう伝えておくね」

瞳は着信を切る。瞳はゆっくりと俺に近づいてきた。

「健二くん、一志くん。三位だって」

「そ、そうか……」

三位。読み切りにははかかなりいい順位と言つてもいいだろう。これは正直なところ厳しいかもしれない。

「どう? 勝てそう?」

「やってみないと分からない……けど、勝つき。必ずな」

気を取り直してアシスタントの仕事に戻った。後は天命を待つのみ。

そして、あつという間に俺が描いた漫画、『エレメントドラゴン』が掲載される週がやってきた。

俺と瞳は漫画を読みながら待っていた。俺はカギリリス先生の『ロボット・プラネット』を一巻から読み直している。改めて読み直すと伏線が散りばめられていても漫画作りに参考になる。

「いやー、やっぱり面白いね。エレメントドラゴン」

今週号のジョークを読んでいた瞳が俺の漫画を賞賛してくれた。

「もう何回も読んだだろ。そんなに面白いと思うか？」

「うん。一志くんの漫画にも勝ってると思うよ」

「そ、そうか……」

瞳にそう言われると自然と自信が湧いてくる。すると、机に置いてあるスマホが振動した。確認すると、着信先は千尋さんからであった。俺はすぐさま電話に出た。

「もしもし。健二くん？」

「お、お疲れ様です。千尋さん。何位でしたか？」

「三位よ」

「三位……」

鸚鵡返しに呟いた。シヨックというわけではないが、郡山先生と同じ順位ということになんとも言えない感情が心を満たす。

本来であれば手放しで喜んでもいい順位なのだろうが、同率であることを知った郡山先生はどう反応するだろうか。

「勝負のことを気にしてるんでしようけど、普通に喜んでいい順位だと思うわ。とりあえず、連載ネームを描いて欲しいからとりあえずは連載用のネームを作ってくれませんか？」

「は、はい。分かりました」

俺は一度電話を切ろうとした時、千尋さんは「あ、そういえば」と思い出したように呟いた。

「さっき、健二くんの妹が仕事先聞いてきたから住所教えておいてから。後で訪ねてくると思うわ。それじゃ」

「はっ。」

言いたいことを言い残した千尋さんはすぐに電話を切った。

「おいおいおい、妹が来るだも!?!」

「け、健二くん! どうだった?」

「すまない……瞳、三位だった」

「そ、そっか！ 良かったじゃん！」

俺にはすぐに分かった。無理に笑顔を作っていると。やはり、俺が郡山先生に勝てなかったのを悔いているのだろう。

「本当……ごめんな」

「何を謝ってるの？ 負けたわけじゃないしさ」

「けど、俺。今回だけは絶対に勝ちたかったんだ。瞳の為に……」

「健二くん……」

情けないことにいつの間にか自分の目から涙が溢れていた。千尋さんから順位を聞いた時、シヨックじゃないと自分の中では思っていたのだが、勝てなくてやはり悔しい。

こんなに悔しい思いをしたのは打ち切りを宣告された時以来である。

「健二くん！ 私は誰がなんと言おうと健二くんの漫画は面白かったと思う……だからさ、この悔しさを連載にぶつけようよ！ それで今度こそ、一志くんに勝って」

「ああ、そうだな」

俺は手の甲で涙を拭った。この借りは必ず、連載で返してみせる——そう心に誓った時、ドアの方からインターホンの音が聞こえてきた。

「はい！ 誰だろう……千尋さんかな？」

瞳は駆け足で玄関に向かった。そこで俺は思い出した。妹のことを。

「お、おい！ 瞳ー！」

俺は慌てて、瞳を呼び止めようとした。しかし、もう遅かった。瞳が玄関の扉を開ける。

扉の外には小柄で桃色髪の少女——俺の妹である白河奈緒が無表情で立っていた。

「いやー、まさか健二くんの妹がやってくるなんてね。本当、驚いたよー！」

瞳は奈緒がやってきたのをなぜか嬉しそうにしていた。俺は憂鬱で仕方ない。

「どうも初めまして白河奈緒です。いつも兄がお世話になっております」

「こちらこそ初めまして、岩木瞳です！ よろしくね、奈緒ちゃん」

「それでお兄さん。どういふことか説明してくれる？」

「えつとな……だから、ここでアシスタントしてるんだよ」

「泊まり込みで？」

奈緒が鋭い眼光を向けた。相変わらず睨む表情が父さんそっくりで怖いな。

「そ、そうだな……」

恐る恐る泊まり込みでアシスタントしていたことを認めると、奈緒がドンと右手で机を叩いた。びっくりした。

「ダメだよ！ そんなの。男と女が二つ屋根の下で暮らすなんて、何かあつたらどうす

るのさ……は、今すごく良いアイデアが浮かんできた。メモメモ……」

奈緒はポケットからメモ帳を取り出し、何かを書き込んだ。

「な、何をメモしているんだ？」

奈緒は突然立ち上がると、右手を額にかざし、厨二病全開のポーズを決めた。

「お兄ちゃん。実は私ね、小説家を目指すことにしたんだ！」

「は？ 小説家だと？」

そんなこと初めて聞いた。確かに奈緒はいつも小説を読んでいるイメージはあったのだが。

「うん。最近、書き始めたんだ！」

誇らしげに小説を書き始めたことを語る奈緒。奈緒が一体、どんな小説を描いているのか少しばかり気になってきた。

「へえ……どんなの描いているんだ」

「えつとね、恋愛ものなんだけど読んでみる？」

「ああ。少し読ませてくれ」

「あ、私も読みたいー！」

奈緒は自身のスマホを渡した。どうやら『ミッドムータータンノベルズ』という小説投稿サイトに小説を投稿しているようである。

タイトル名は『覗いたさきにあるもの、それはシスター』である。俺は瞳と共に早速一話目を読んでみた。

「……………」

俺と瞳は小説を読んで思わず黙り込んでしまった。というのも、この作品、ガツツリエロ小説である。内容は近親相愛で血の繋がった兄妹があんなことやこんなことをするという話。

性描写を惜しげも無く描かれており、十八歳未満の人には絶対に見せてはいけけないのだ。

「ど、どうかな……………」

奈緒は恐る恐る小説の感想を訊いてきた。どうもこうもない。

「エロ小説じゃねえか!!」

「あ、うん。そうだよ」

奈緒はあつさりとした。ここまで清々しいともはや何も言う気力がなくなる。

瞳の様子を確認すると、恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

「お前、官能小説家を目指しているのか？」

「そう。私は兄妹ものの官能小説で一気に成り上がろうと思うんだ」

「そんなの、父さんと母さんが反対するに決まってるだろ」

「うん、反対されたよ。だから、家でしてきたんだ」

「お、お前な……」

家出したからわざわざ俺のところに来たってことか。ちよつとだが悲しい。

奈緒がやってきた時、手にはやけに大きなスーツケースを持っていた為、何かおかしいと思ったのだが。

「いや、純粹にお兄さんに会いたかったてのもあるんだよ。本当に」

今更フオローになっついていないフオローをする奈緒であった。

「そうか。来てもらって悪いが帰ってくれ」

「だが断る」

「いや、悪いが仕事で忙しんだ。頼むから帰ってくれ」

「だが断る。こんな美人さんと一緒に暮らしていたら間違いが起るに決まっている」

だが断るじゃねえよ。意地でも帰らせるべく、立ち上がろうとすると瞳は俺の肩を掴んできた。

「ちよつと待って、健二くん」

「な、なんだよ……」

「ここはしばらく家に置いてあげない？」

「ええ!？」

瞳の提案に俺は狼狽した。

「瞳さん！ いいんですか」

すると、瞳は俺の耳元で小さく囁き始めた。

「親御さんと喧嘩中みたいだしさ、お互い頭が冷えるまで置いておこうよ」

「だ、だがな……」

「健二くん。家族と入れる時間は大切にすべきだよ」

論すような口調で瞳が告げる。親がいない瞳に言われると何も言うことができない。

「わ、分かったよ……」

「ありがとうございます！ 瞳さん。私、家事全般得意なので必要なことがあつたらな

んでも言つてくださいね！」

「うん、よろしく！」

描き続ける理由

「お兄ちゃん、瞳さん。料理できました！」

早速、奈緒は夕食を作り、テーブルに料理を運んでくれた。俺たちは料理を食べることにした。

「わー、すつごく美味しそうだね奈緒ちゃん。料理上手なんだね！」

「そんなことありませんよ」

奈緒は照れた様子を見せた。この家に来てからまだ一日も経っていないというのに、随分と馴染んだものである。

俺たちは食卓を囲む。奈緒の料理を食べるのはかなり久々だ。奈緒はオムライスを作った。俺が瞳の家でアシスタントを始めた日にオムライスを作ったことがあるが、オムライスの作り方を奈緒へ教えたことがある。

「うん！ 奈緒ちゃん。卵がトロトロとしてすつごく美味しい！」

「喜んでもらえて良かったです！ お兄ちゃん、どう？」

「ああ、美味しいよ」

瞳の言う通り、卵が半熟状態でトロトロとしており、かなり美味である。チキンライ

スも俺が作るものよりもしつかりと味付けされている。

「料理の腕はもう完全に奈緒に追い越されてしまったな。もはや漫画を描くスキル以外、俺は奈緒より何もかも劣っていると云ってもいいだろう。」

「父さんと母さん、どうしてる?」

「えっと、うん。普通に元気にしてるよ」

「そっか」

実家にいた時のことを思い出した。俺は親とあまり仲が良くなかった。

漫画家という不安定な職業を目指したし、高校も中退してしまった俺に原因があるのだが。

「お兄ちゃん、たまには帰ってきたら? 父さんと母さん、すつごく心配してるよ」

「まあ、そのうちな」

「もう、そうやって先延ばしにするー! ダメだよ、そんなんじや!」

奈緒は仏頂面をし、意を唱え始めた。

「そうは言ってもな……合わせる顔が無いんだよ。打ち切りになっちゃたし……連載になつたら顔出すよ」

「帰ってあげなよ。健二くん」

話を聞いていた瞳が口を挟み、俺は少し驚いて瞳の方を見た。

「え？」

「私、もう両親いないけどさ……親孝行したいと思っても会えなくなるかもしれないだよ？ そんなの……絶対嫌じゃん」

「そ、そうだな……」

瞳にそのように言われては何も言えなくなる。確かに一度、両親と向き合うべきなのだろう。いつまでも逃げてばかりじゃいられない。

「よし！ それじゃ、お兄ちゃん。いつ帰ってくる？」

いつ帰るか……思い立ったら吉日である。

「瞳、明日休み貰ってもいいか？」

「うん、いいよ」

「ええ明日!？」

奈緒は驚きの声を上げる。明日、奈緒とともに実家へと戻るということだ。

「そうだ」

「無理だよお兄ちゃん！ 明日、学校あるしき。実家に戻るなら一人で行ってよ！」

「一日くらい休んでも大丈夫だろう？」

さすがに一人で実家の敷居を跨ぐのはちよつと気が引けた。

「大丈夫じゃ無いし！ 結構、欠席とか厳しい学校なんだからね！」

「そ、そうか……自称進学校みたいだな」

自称進学校とは校則が異常に厳しい、宿題が多い、休暇に授業がある、無断欠席厳禁と言った特徴を持つ学校である。

偏差値は五十五から六十五までという実に中途半端なところが多く、俺が通っていた高校がこれに当たる。

ちなみに奈緒の通っている高校は偏差値七十以上のれっきとした進学校である。

「うん、だから学校休むのは無理！」

「それじゃ、放課後一緒に実家に帰ろうか。すまん瞳。明日、途中まで仕事して、明日の午後から出勤しようと思うんだがいいか？」

「うん、全然いいよ！」

「ちよつと！ 勝手に話を進めないでよ！ 私、家に帰りたくないんだってば！」

断固として家に帰ることを拒もうとする奈緒であった。さつきとは立場が逆になった。

「ダメだ。明日帰るぞ奈緒」

「いやーだー！」

「奈緒ちゃん。もし健二くんに会いに来たくなったらいつでも会いに来ていいから。だから、明日帰ろう？」

瞳は諭すような口調で帰るよう提案する。しかし、いくら瞳の説得でも奈緒が素直に言うことを聞くとは……

「ほ、本当にいつ来てもいいんですか？」

「うん！ 勿論だよ」

「分かりました。それじゃ、明日お兄ちゃんと一緒に帰ります！」

さつきまであれほど帰りがらなかったのに、瞳が説得したらあつさりと明日帰ることを承諾しやがった。

その日の夜、奈緒は瞳の部屋で寝ることになった。

俺は自分の部屋に籠り、ほぼ徹夜で連載ネームの構想を練っていたのだがあまり作業を進めることができなかった。

次の日、奈緒は制服に着替え、リビングにやってきた。朝食にトーストとサラダ、ベーコンエッグを作り終え、配膳を行なっていたところである。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう。よく眠れたか？」

「うん、瞳さんとたくさんおしゃべり出来て楽しかった」

「そっか。瞳はまだ寝てるのか？」

「うん、熟睡してるよ。起こした方がいい？」

「いや、別にいい。いつも、九時くらいには起きてくるからな」

「そっか、分かった」

俺と瞳は椅子に座り、朝食を食べることにした。瞳の分の朝食は皿にラップを掛けておくことにした。

「美味しい……」

ポツリと奈緒が呟いた。上手く作れたか不安であったが、口に合うようで少し安心した。

「そうか、良かった」

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「漫画描くの……楽しい？」

「ああ、楽しいよ」

特に最近は。瞳と出会ってからこれまでのスランプが嘘のように話が思い浮かんでくる。

「そっかあ。お兄ちゃんはやりたいたいこと仕事に出来ててすごいな」

「いや、出来てないだろ。今、連載してないしさ」

今は何とかアシスタントだけで生活できているが、アシスタントする前は他のバイトと掛け持ちしなきゃ生活することもままならなかった。

「そうかもしれないけどさ、夢に向かって真つ直ぐに進むなんて本当にすごいと思うよ。私はあれこれと考えて立ち止まっちゃうって言うかさ……」

「それが普通だ。どんな人間も一度は諦めようか考えるもんだ。俺も考えたことあるしな」

打ち切りにあつた時、俺は漫画家を辞めようと思つたことがある。

しかし、打ち切り直後に担当が変わり、千尋さんにであつた。

千尋さんは俺を見捨てなかつた。俺を人気作家にすると、熱心に説得してくれた。

自信があつた連載会議で落ちて、本当に落ち込み諦めそうになつたが明梨さんの励ましと瞳との出会いがあつて、今も連載を目指して漫画を描いている。

「でも、諦めなかつたんだね」

「ああ。やっぱり俺は漫画が好きだからな」

結局はこれに尽きる。いくら漫画を描くのを止めようとしても結局辞めることができなかつた。ある意味、一種の呪いとも言える『漫画を描く』という行為。

辞めようとして気づいたのである。俺から漫画を取ったら何も残らないと。

「そっか……やっぱりお兄ちゃんはずいいや」

実家

奈緒は朝食を食べた後、学校へと向かった。俺は奈緒を見送りした後、母親に奈緒が家出して俺のところ泊まったことをLINEで連絡した。

俺が瞳と暮らしていることは勿論伏せておく。加えて、今日奈緒と共に戻ることも伝えた。

午後三時までアシスタントの仕事をし、奈緒が持つてきていた家出様のスーツケースを手を持ち、家に向かった。

瞳の家から実家までは駅七つ程離れている。まずは電車を乗り継ぎ、実家の最寄駅まで向かう。そこで奈緒と待ち合わせをしている。

出発してから三十分して実家の最寄駅に着いた。駅の待合室でスマホを弄っている奈緒の姿を見つけた。

「お待ちせ」

「うん。それじゃ行くかうか」

奈緒と共に歩き、実家に向かう。流石にここまで来るとかなり緊張してきた。

「お兄ちゃん。もしかして緊張してる？」

「い、いや？ 全然……」

「そ、そっか……」

余程、俺が緊張していたためか、奈緒は苦笑いを見せる。

別にやましいことなど何もしていないが、久々に実家に戻るため何とも言えない緊張感がある。

やがて、住宅街に入り実家が見えてきた。白を基調としたコンクリート建の一軒家。ここが俺が生まれ育った実家である。

懐かしいと思う反面、もう俺の居場所ではないと感じる様な謎の拒絶感に苛まれた。庭の手前で俺は立ち止まる。奈緒はそんな俺に対して不思議そうに首を傾げた。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「奈緒。俺、やっぱり帰ろうと思う。父さんと母さんによろしくな」

くるりと翻し、先ほど来た道に戻ろうとした。しかし、奈緒ががっしりと俺の手首を掴む。

「ちよつと……ここまで来て何言ってるのさ！」

「だって、やっぱり戻るのには抵抗があるっていうか……」

両親から一体、何を言われるか分かったもんじやない。

もしかしたら、「いつまでも夢見てないで普通に就職しなさい！」なんて言われるかも

しれない。もう少しで連載を取れそうなのにそんなことになったら最悪である。

「いいから行くよ!」

結局、奈緒によって半ば強引に実家に向かうことになった。奈緒はインターホンのボタンを押し、「ただいま」と至って普通に玄関を潜った。

「お前……そんなあつさり」と

「お帰りなさい。二人とも」

エプロンを着用した母さんが出迎えてくれた。奈緒がそのまま大人になった様な容姿の母親は久々に会ったが全く変わってない様に見えた。

「ただいま」

「ほら、健二も早く上がりなさい」

「あ、ああ……」

久々の我が家に足を踏み入れる。俺は自分の部屋に移動した。

「久々だな……」

勉強机の隣にある大きめの本棚。本棚の中には漫画ばかり入っている。小さい頃、よく勉強の合間に漫画を読んでは両親に怒られたものだ。

俺は本棚から一冊の漫画を取り出した。その漫画は『遊んで遊んで遊びまくれ!』である。ページを捲ると流麗なイラストが目飛び込んでくる。

「やっぱり綺麗な絵だな」

よくこの漫画に出てくるキャラクターの模写を俺は何度も繰り返したものである。それが今の画力の礎となったと言っても過言ではない。

『遊んで遊んで遊びまくれ!』を読み終わった後、他の漫画も読むことにした。『あいつの空』や『黒いバスケット』を読んだ。競技経験こそないものの、スポーツ漫画のなかで、バスケット漫画が一番好きである。

時間を忘れて漫画を読んでいると扉の方からノック音が聞こえてきた。扉を開けると、何と父親が立っていた。

「久しぶりだな。健二」

「え、あ……ああ」

俺と奈緒の父親である白河雄吾（しらかわゆうご）——今年で四十八歳を迎え、鋭い三百眼をしており、その突き刺す様な視線で俺を見据えていた。

父は警察官として働いており、職業柄かとても生真面目な性格をしていて、少し……いや、かなりの苦手意識があった。

「奈緒がお前のところに泊まったみたいだな。あいつ、何かやらかさなかつたか?」

「いや、特には」

「そうか。とりあえずご飯出来たからリビングに来てくれ」

「分かった」

俺は父親と共にリビングに向かった。テーブルには母親が作った料理が並べられている。

さらにビール瓶も置かれている。勿論、親父が飲むためのものだ。

「いただきます」

早速、俺は母親が作ってくれた肉じゃがを食べることにした。じゃがいもはホクホクとしていてとても美味しかった。

「美味しい……」

「そう。良かったわ」

味の感想を述べると、母は嬉しそうにした。

「それで奈緒よ。何か言うことがあるんじゃないか？」

父が厳しい口調で瞳に訊いた。先ほどまで穏やかであった夕食に緊張が走る。

「えっと、その……家出なんかしてごめんなさい」

父はコップに入ったビールをぐいっと一気に喉に流し込んだ。

「違う。確かに家出も大概だが、健二のところまで世話になったんだろ。ちゃんとお礼は言ったのか？」

「い、いや。まだだけど……」

瞳がたじろいでいる。確かに突然訪問してきたのは驚いたが、特段気にしてはいないのだが。

「なら、ちゃんと健二にお礼を言いなさい」

「うん。お兄ちゃん。昨日は泊めてくれてありがとう」

「あ、ああ……」

泊めたのは俺ではなく瞳であるが。

「父さん。奈緒が家出した理由は訊いたよ」

「そうか。断固として、俺は認めることができません。小説家などという不安定な職業はな
すると奈緒は明らかに不機嫌そうに眉をひそめる。

「なら、俺のことも認めてないのか？」

「そんなことはない。確かに最初はお前が普通の会社に勤めて欲しいと思っていたが、
今はちゃんと認めている」

「この人ったら、毎週欠かさずジョークを購入してるのよ。最近『健二の読み切りが連
載されたぞ！』って大騒ぎしてたのよ」

母が茶化す様に父の行動を説明した。行動を暴露された父はかなり動揺したのか、む
せ始めた。

「や、やめろ……俺がお前を認めたのはちゃんと賞を取り、漫画に向き合ってると思った

からだ」

「父さん……」

知らなかった。俺は両親からちゃんと応援されていたのか。これまで二人は俺が漫画家になることを快く思われていないのではないかと感じていた。

「なら、私の夢も応援してくれても……」

「悪いが『まだ』それはできないな。まずは賞でも取れ。そうすれば話は聞いてやる」

まだということとはちゃんと結果や行動が伴えば応援してくれるということか。

「奈緒。良かったじゃないか。全く反対しているわけじゃないみたいだよ」

「う、うん……お兄ちゃん。私、絶対に小説家になるよ！」

「ふん……俺としては、奈緒は普通に働いた方が幸せな人生を送れるんじゃないかとは思っているがな」

「悪いけど、父さんの望む通りにはならないよ。絶対に日本を代表する小説家になってやるんだから！」

奈緒は勢いよく啖呵を切った。こうして、冷静に奈緒を見るとやはり俺たちは兄妹なんだなと実感する。

俺もかつてこうして両親に「日本一の漫画家になる」と宣言したものだ。しかし、日本一の漫画家になるなどそうそう容易いことではない。

だが、まずは自分がなれると信じないことには始まらない。

「それより、健二。お前、少しくらい連絡するべきじゃないか？ 家を出たきり音沙汰が無くて心配したぞ」

「い、いやあ……」

「そうだよお兄ちゃん！ 私からの連絡も無視するし！」

「健二つたら本当薄情よねー」

身内三人から責められた。帰りづらかったとは言え、正論すぎて何も言い返すことができない。

「い、いやー帰り辛かったというか、アシスタントの仕事が忙しかったというか……」

「まあ、何だ。たまには顔を出すくらいはしなさい」

「ああ、そうするよ」

久々に実家に戻った俺は家族とたわいもない会話をしながら時間を過ごした。ご飯を食べ終った後、風呂に入り、自分の部屋に戻り、漫画を読んだ。

連載用ネームも進めなければならぬのだが、こうして他の先生の漫画を読むことで展開が思いつくことがある——というのは建前で単なる現実逃避だったりする。

「さてと……少しは進めないと」

漫画を本棚に戻し、連載用ネームの一話目に取り掛かろうとした。机の上に置いてい

たスマホが振動した。千尋さんから電話がきた。

「もしもし? 健二くん。ネーム進んでるかしら?」

「まあ……ボチボチですわね」

あまり進んでいないが正直には答えなくておく。しばらく千尋さんが沈黙すると再び口を開いた。

「そう。次の打ち合わせなんだけど、来週の水曜日にいつものファミレスでお願いしてもいい?」

「分かりました」

「後、次の打ち合わせまでに一話目のネームの叩き台を作っておいてね」

「は、はい……」

やべえなこりゃ。少し急がねば。電話を切ると、『エレメントドラゴン』の一話目のネームを練り始める。

読み切りでは、ページの関係で主人公の過去を簡単に書き、主人公との因縁が深いドラゴンを一体倒して終わりであるが、連載では主人公の過去を読み切りの時よりも深く描く。

さらに、ドラゴンと遭遇するまで、中ボス敵なキャラクターに遭遇させる。

中ボスの強さを強調することで、ドラゴンがどれほどの脅威かということを強調させ

ることにした。

読者の予想を超える強さを登場させることはバトル漫画の鉄則と言ってもいいだろう。

瞳のところのアシスタントをしていたおかげで大分作り方のコツも大分分かってきた。

「さてと、そろそろ寝るかな」

作業に没頭していると、すでに深夜になっていた。明日からまたアシスタントの仕事があるのだ。今日はここで切り上げ、ゆっくりと休むことにした。

解雇通告

次の日、俺は瞳の家に戻り、アシスタントの仕事をしていた。

両親から「もつとゆつくりしておけばいいのに」と言われたが、仕事を休むわけにはいかない。

それに今週の土曜日は瞳と共に遊園地に行く約束をしている。その為にも少しでも作業を進めておかなければならないのである。

「桃仁少年、いよいよクライマックスが近づいてるって感じだな」

俺が背景を担当しているのは敵の最強幹部と技の応酬を繰り広げているページである。次の話で決着がつきそうである。

「うん。今の敵を倒し終わったらラスボスの修羅鬼との戦いになるよ」

修羅鬼とは序盤から登場していた主人公の宿敵である。その正体は主人公である桃太郎の兄であるのだが、まだ本編では明かされていない事実だ。

「そっか。それも終わればいよいよ終わりなんだな」

「うん、そのつもりだよ。すごい最終回にする予定だから楽しみにしててね！」

前にもうすぐ終わらせるつもりであることを聞いていたから特段驚かないが改めて

もうすぐ終わりであることを作者から聞くと、一読者としてやっぱり寂しいものである。

「ああ。楽しみにしてるよ」

金曜日には何とか仕事を終わらせ、遊園地に行く予定であった土曜日が訪れた。

『エレメントドラゴン』の一話目のネームも無事完成し、心置きなく俺たちは千葉県にある『デイスティーランド』に訪れた。

「うわあ！　すごい人数だね」

休日ということもあってか、デイスティーランドにはたくさんの方がいた。

入場券を購入し、入場ゲートを潜る。真つ先に目に入ってきたのは大きな噴水であった。

周りにはまるで外国を彷彿とさせるような洒落た建物がいくつも点在している。

「健二くん、写真撮ろう！　写真！」

「そ、そうだな」

瞳はとてもテンションが高かった。俺たちは噴水の前に立ち、スマホで写真を撮る。

「それじゃ、早速アトラクションに乗るか」

「うん！　まずはスクラッシュマウンテンに乗りたい！」

スクラッシュマウンテンとは丸太型のコースターに乗り、高いところに登り、激しい

落下のスリルを楽しむアクションである。最後の落下では水しぶきを浴びることになるらしい。

「いきなりスクラツシユマウンテンか？」

「うん、もしかして健二くん絶叫系苦手だったりする？」

「いや……別に大丈夫だ」

「えー？ 本当？」

「ほ、本当だよ……」

ぶつちやけ少し怖いがそんなこと言えない。

「なら問題ないね。早速行こう！」

スクラツシユマウンテンは人気アトラクションである。すでに長蛇の列ができていた。

待ち時間が表示されているが二時間待ちである。

「二時間待ちか……」

「ふっふっふっ……安心したまえ、健二くん」

不敵な笑みを浮かべる瞳はポケットからどこぞの二十二世紀のタヌキ似のロボットのごとく、『あるもの』を取り出した。

「そ、それは……」

瞳の手に持っていたのは『アーリーパス』である。アーリーパスとはアトラクションを早く乗ることができる優先チケットである。

「三日前に買っておいただ。これで五つのアトラクションはあんまり並ばないで乗ることが出来るよ！」

「おお、それはいいな」

スクラツシユマウンテンのアーリーパス持ちの列に並ぶ。その列もまあまあ人が並んでいるが、一般列に比べれば雲泥の差である。

十分後くらいにはスクラツシユマウンテンに乗ることができた。落下防止用のレバーが自動的に降りてくると、ゆっくりとコースターが動き出す。

「いよいよだね……」

「そ、そうだな」

出来るだけ平然を装っていたが内心かなりビクビクしていた。コースターは勾配が強い坂を登る。頂上まで達すると一気に落下した。

「うわー！」

「あははは！ おもしろーい！」

俺は恐怖心から思わず目を瞑ったが、瞳は楽しそうに叫んでいる。休む間も無く、先ほどよりも勾配が急な坂を登り始める。

「ま、マジか……」

軽いGが身体にかかるのと一気に落下するのが分かった。なんかぐわんと来た。ぐわんと。

「あわわわわ……」

想像以上に激しいアトラクションである。もうそろそろ終わりか——そう思った矢先、これまで勾配が急な坂をコースターがゆつくりと登り始めた。

「う、嘘だろ……し、死ぬ！」

「うわ！ すごく超楽しみ！」

顔面蒼白な俺とは真逆に瞳はウキウキとしていた。コースターは頂上へと登り切ると、真つ逆さまに落下する。

「ぎゃあああああああ！」

「たーのしー！！」

まるで身体が宙に浮かんでいる様な感触。落下する瞬間、俺たちは軽く水しぶきを浴びることになった。

「いやー、楽しかったね健二くん！」

「そ、そうだな……」

正直この時点で俺のライフはゼロに近い。しかし、こんなところで弱気な姿を見せる

わけにはいかない。

「ねえ、次どこに乗る？」

「そうだな……次はもうちよつとゆつたりとしたアトラクションがいいな」

「ゆつたりとしたアトラクションか……『イツツアミニワールド』なんかどう？」

「ああ、良さそうだな。そこにしよう」

イツツアミニワールドはボードに乗り、人形に扮した世界中の子供たちが「小さな世界」を歌い、世界一周の旅を楽しむという内容である。

イツツアミニワールドはマウンテン系のアトラクションと比べて大分空いており、アーリーパスを使わずぐに乘ることができた。

ボードに乗り込むと、水流に沿ってゆつくりと動き出す。進んだ先には可愛らしい人形が所々に置かれており、音楽に合わせて動いている。

「おー！ 見て見て健二くん、人形だよー！」

「たくさんいるな」

瞳はスマホを取り出すと、次々と人形を撮影した。

「これはなんかインスタプレーションが湧いてきそう……人形を操って戦う敵とかいいかもしれない」

急に漫画家モードになり始めたのか、何やらスマホに高速で入力し始めた。多分、メ

モを取っているのだろう。

そんな瞳を他所に楽しそうに動いている人形を俺は呆然と眺める。

「助け合う世界か……」

自然と独り言が飛び出た。

漫画家という仕事において、助け合うなんて場面はほとんどない。

連載している他の作家、連載を目指す作家は全てライバル、すなわち敵である。

しかしながら、漫画家にも漫画家同士の繋がりというものがある。

初めてアシスタントする時、面倒を見てくれた先生は仕事に関しては厳しい人であったが、プライベートではとてもよくしてくれた。

ストーリーの組み立て方、キャラクターの作り方など、時間外でも丁寧に教えてくれ、今の俺の漫画家活動に生かされている。

しかしながら、打ち切りにあってしまい、その後は特にヒット作も出すことなく、ジヨークから戦力外通告を受けた。

あの先生、元気にしているだろうか。

次にアシスタントした先生はギャグ漫画家の先生で、かなり変わった先生であった。ぶっ飛んだギャグが持ち味の作品を描いているとはとても思えないほどの口数の少な

い先生で、常に仕事の指示が紙で渡された。

さらにその先生は仕事で、ホラー映画を流す。しかも大音量で。ある程度、ホラー映画に耐性のある俺は何とか耐えられたが、他のアシスタントは次々と辞めていった。

その先生の作品は普通に完結したため、アシスタントを辞めることになったが、ホラー映画を見たせいか、グロテスクなキャラクターを描くのが上手くなった。

漫画家という職業は常に他の漫画家と勝負強いられる。だが、決して孤独というわけではない。

アシスタントという仕事をするこゝろでできる繋がりが確かにあるのだ。

俺と瞳の繋がりもこうしてできた。

だが、もしも俺が連載を獲得すれば、瞳はライバルとなる。

「なあ、瞳」

「なに？」

「あ、ありがとうな。俺をアシスタントとして雇ってくれて」

瞳にお礼を言うと、彼女は目を丸くした。

「どうしたの？ 急に」

「いや、色々あったと思ってな。瞳のところでアシスタントしてから楽しいことばかりだよほんと」

仕事で瞳の原稿に触れるのは自分にも実りのあることであった。

瞳の描いている姿を見ると、いつもよりもやる気が湧いてくる。

漫画を描いている時の瞳は実に熱情的で、魅力的であると思っていた。

「私だって……健二くんには感謝してるんだよ。家事とかいろんなこと手伝ってくれたりさ」

「はは、家事だけかよ」

「そ、そうじゃないけどさ……」

冗談のつもりで言ったのだが、なぜか瞳は悲しげに顔を俯かせる。

俺と瞳の間に何とも言えぬ静寂が生まれ、アトラクション内に流れるBGMと水がさ

ざめく音のみが聞こえる。

「どうしたんだ？ 瞳」

「あの……私さ……」

『ガタン』とボートが大きく揺れ動いた。気が付けばアトラクションが終わっていた。

「上がるか」

「う、うん……」

イツアミニニワールドを後にした俺たちは園内で昼食を食べ、他のアトラクションを見て回った。

さつき瞳が言おうとしたことが気になるが、なんだか怖くて訊かないでおいた。夜も更け、外が暗くなるとメインイベントであるディティニーランドのマスコットキャラクター達によるパレードが行われる。

電光色が施された大きな車の上にはマスコットキャラクター達が楽しそうに踊っている。

さらに何発もの花火が打ち上がり、夜空には様々な色に光り輝く花が咲き誇る。

「ねえ、健二くん」

じつと花火を見ていると、不意に瞳が話しかけてきた。

「ああ、なんだ？」

「私さ、できることならずっと健二くんと一緒にいたい」

瞳がぎゅつと俺の手を握ってきた。手からほんのりと暖かい瞳の体温が伝わる。

「ずっとって……そんなの無理に決まってるだろ」

俺が連載することになる場合はどうやったって瞳の家から出て行かなきゃならない。

「どうしても……無理？」

悲しげに顔を俯かせた。俺のアシスタントの実力を見込んでこれからも一緒に仕事したいと思ってくれた彼女の気持ちは嬉しいのだが漫画で成功するためにはいつまでもアシスタントしているわけにもいかない。

「俺はそんなに描くの早いわけじゃないからな。連載するなら新しく仕事を借りなくちやいけないだろう。そうなたら……」

「違う。そういうわけじゃないの」

「そういうわけじゃない？ ど、どういうことだ？」

「健二君。私が言いたいこと分からないの？」

「ああ、全く分からない」

アシスタントの仕事において、瞳が俺に求めている仕事は彼女の指示で全て理解することができた。だが、今の瞳は何が言いたいのかさっぱりである。

「そっか。分からないなら……いい」

瞳は俺から背を向けると逃げないように歩き始めた。

「お、おい……瞳、どこに行くんだよー」

「帰ろう。もう遅いし」

「か、帰るなら帰るって……それなら」

瞳を見て驚愕した。なんと彼女は泣いていた。

「ひ、瞳……」

「健二くん、悪いけど今日限りで解雇してもいい？」

「え……」

突然の解雇宣言である。あまりの出来事で頭が追いつかない。

「千尋さんには私から後で説明しておくから。荷物は健二くんの実家宛に送っておくね。それじゃ、また」

そう言い残すと、瞳はその場から走り去っていった。他のお客さんたちが楽しそうにパレードを見つめている中、俺は孤独な世界へと取り残された。

自分の気持ち

瞳と遊園地に行ってから三日明け、俺は打ち合わせ場所であるファミレスを訪れていた。

ファミレスで、すでに千尋さんが座っているのが見えたため、千尋さんが座っている席へと向かった。

瞳から解雇宣言されてから、俺は実家に戻ることにした。一度、瞳が住んでいるマンションに訪れるも瞳は出てきてくれず、LINEや電話でコンタクトを試みるも、全く駄目であった。

「お疲れ様。それじゃ、打ち合わせ始めましょうか」

「そうですね」

俺は椅子に座り、昨日でやっと完成させた一話目のネームを取り出そうとした。

「どうかしたの？ 健二くん。なんか元気なさそうだけど」

「いえ、なんでもありません。これが一話目のネームです」

一話目のネームを鞆から取り出し、千尋さんに差し出す。千尋さんはネームを受け取ると、ものすごく真剣な表情でネームを読む。

ものすごい速さで読み会えると、『こほん』と咳払いし俺の方に視線を向ける。

「読み終えたわ」

「ど、どうですか?」

「はつきり言うわね。全然ダメ」

千尋さんはバツサリと切り捨てた。嫌な予感があった。だが、ここまで面白くないと千尋さんに言われるのは久々である。

「そ、そうですか……」

「最初の方は引き込まれたけど、段々となんか単調になっていくというか……っっていうか最初の方と途中の方で別の人が作ったみたいなき感じなんだけどやっぱり何かあったの?」

多分、最初の方というのは俺が瞳から解雇宣言される前に描いたところであろう。

それ以降は瞳に解雇宣言された後に描いたものだ。

あの時以来、俺は全く漫画……いや、何もかもが手につかなくなった。

「千尋さん、実は……」

俺は覚悟を決め、遊園地での出来事を話すことにした。

瞳が俺とずっと一緒にいたいと言ってきたこと。

それに対し、俺はずっと一緒にはいられないと否定したこと。

そして、解雇宣言を受けたこと。

それらを隠すことなく、千尋さんに伝えた。すると、千尋さんは呆れたように大きなため息を吐く。

「健二くん、あなた本当に鈍いわね……」

「に、鈍い……?」

「そんなの好きって言ったようなものじゃない」

「瞳が、俺をですか?」

俺を……どうして俺なんかを。

「そうよ。好きじゃない相手と一緒に水族館とか遊園地に行くわけないでしょ。健二くんは岩泉先生のこと、どう思ってるの?」

「どうって……立派な漫画家だと思ってますよ。漫画に関していつも真剣で尊敬する先生だと……」

「そうことじゃない。異性としてってことよ……」

「異性としてですか……?」

異性としてか……考えたこともなかった。いや、考えないようにしていたのか?

普通に可愛らしい容姿をしているとは思う。だが、一緒に仕事をしていたせい、恋人になるとかそういう視点で見たことはなかったような気がする。

「わ、分かりません……」

「そう。けどね、健二くん。ちゃんと答えてあげなさい。そうじゃないと……お互いに不幸になるだけよ」

「そう……ですね」

「そういえば、あの子の家族のことは知ってる？」

「いえ、詳しくは。今はいないとしか」

「あの子の両親はね、小さい頃事故で亡くなったのよ」

事故か。瞳からは死因を聞いていなかったが大方予想通りである。

「えっと、交通事故ですか？」

「そうね。あの子の両親が車で買い物に行った時、トラックに衝突されて亡くなったみたい」

「それは、不幸というか……」

「あの子、両親との思い出があまり無いけど、絵のことで両親に褒められたことが強く記憶に残っているみたいなの。だから、漫画家を目指したんですって」

「そ、そうなんです」

瞳が漫画を描き始めたのは家族との思い出がキツカケか。だからあれほど熱量のある漫画が描けるのかも知れない。

「あの子はああ見えてね。割と寂しがり屋なのよ。ちょっと分かりづらいと思うけど。ちゃんとあの子の気持ちに向き合ってあげてね。というわけで明日までに答えを出しなさい」

「そ、そんな無茶な！ 一週間は考えたいと思ったのに！」

「そんな時間はないわ。漫画家は時間との戦いなものよ！ 今のままじゃ、岩泉先生にも悪影響が起こるわ。いい？ 明日の十二時にまたこのファミレスに来て。一緒に岩泉先生のところに行きましょ」

「千尋さんも付いてくるんですか!？」

それはつまり、告白の答えを千尋さんの前で答えるということだ。なんだその罰ゲームみたいな展開は。

「逆よ。健二くんが私に付いてくるのよ。岩泉先生、健二くんと会ってくれないんでしよっ。」

「た、確かにそうなのですが……」

「というわけだから、また明日ね。ネームの直しはこれが解決してからにしましょ」

「は、はい……」

千尋さんと別れた後は家に帰ろうと思ったが、なんだか帰る気にはなれず、漫画喫茶にでも寄ろうと思ひ、近くの漫画喫茶へと向かうことにした。

「おい」

店の中から入ろうと思つたら不意に背後から誰かに話しかけられた。振り向くと、そこには銀髪の青年——郡山一志先生が立っていた。

「い、郡山先生……」

まさかこんなところで出くわすとは。

『まさかこんなところで出くわすとは』とでも思つてそんな表情だな」

「え、エスパーですか!？」

「伊達にギャンプル漫画描いてるわけじゃねえよ。ある程度、相手の思考はある程度は読める。どうだ？　ちよつと喫茶店で話でもしないか？」

郡山先生に誘われ、俺たちは漫画喫茶の隣にある喫茶店の中に入ることにした。

喫茶店の中には数名の客がおり、ノートパソコンを広げて何やら作業している者や、本を読んでいる者がいた。

「いつもここで話を考えてるんだ。なかなか良い場所だろ？」

「確かに良い場所ですね」

店内はゆつたりとしたBGMが流れており、洒落たアンティークが置かれている店内は隠れ家的な雰囲気があつてインスピレーションが湧いてきそうである。

「何か注文するか？　俺のオススメはエスプレッソとショートケーキだ。俺はこれを注

文する」

「じゃあ、俺も同じものを注文します」

店員を呼び、エスプレッソとショートケーキを二つずつ注文した。

「なあ、その敬語やめないか？ 健二……だったよな？ あんた、俺より年上だろ？」

「ま、まあ……」

「なら敬語はなしにしてくれ。俺も普通に話すから。俺のことも普通に一志と名前で呼んでくれ」

「わ、分かったよ……」

「それじゃ、早速本題に入りたい。前の勝負のことだが」

「うん。結局引き分けになってしまったわけだけど……」

読み切りの順位で勝敗を決めるといふ勝負。俺が勝てば一志が瞳と関わるのをやめ、俺が負ければ瞳のアシスタントを辞めるといふ話だった。

「そうだ。だからこそ、今度は別の形で勝負を決めたい」

「別の形？」

「ああ。次の連載会議でどっちが連載になるかで勝負しないか？」

連載会議で勝負か……少なくとも今の状態では勝ち目はない。それに――

「それは……もうあまり意味のない勝負かもしれないな」

「どういうことだ？」

「実は俺、岩泉先生のアシスタント、クビになったんだ」

「なんだと？ それは本当か」

一志は俺が首を言い渡されたことを聞き、かなり驚いているようである。アシスタントをクビになるなんて普通はないからな。

「ああ」

「一体、何があったんだよ？ 何か瞳に変なこととかしてないだろうな？」

一志の口調が強くなる。返答次第では許さないと感じた感じだ。

「何もしてないよ。それに、さっき一志が言った勝負だが、俺が勝っても意味ないだろう？ 連載するとしたらどうせアシスタントを辞めることになるんだから」

「確かにそうだな。だが、何もしてないなんてことはないだろう。現にクビになってるんだから」

「はは、そうだな。一志は瞳のこと、まだ諦めきれないのか？」

「ああ。そうだ。諦めきれない」

一志が力強く肯定する。瞳の話聞いていた時は単に独りよがりな束縛者というイメージがあったが、少しばかり一志のイメージが変わった。

「漫画家としてのあいつも純粋に好きだし尊敬しているが、俺は女性としてあいつのこ

とが好きだ」

「なら、ちゃんとそのことを伝えた方がいいだろ」

「伝えたよ！ 伝えたけどダメなんだ。どうしても拒絶される。もちろん俺が束縛しすぎたりしてしまっただっていうのもある……正直、どうしたらいいのか分からない」

一志は過去の行いを悔いているようだ。好きという気持ちが空回りしすぎたのだから。

しかし、俺にはそんな経験一度もないから共感することも、アドバイスしてやることもできない。

「勝負した相手にこんなことを聞くのは本当に屈辱的なんだが……俺は一体どうしたらいいと思う？」

藁にもすがる思いで訊いたのだろう。だが、俺には答えることができない。答えなど分からない。

「すまない。俺には分からない」

「そう……だよな……」

「お待たせしました。エスプレッソとショートケーキになります」

店員がエスプレッソとショートケーキをテーブルに置いた。一志がコーヒーを一口、飲む、ショートケーキをナイフで一口サイズに切ると口に運んだ。

「ギャンブル漫画を描いてるおかげで相手の心理をある程度分かるのに、あいつの考えや何をしたら喜んでくれるのかさっぱり分からなねえ。ま、そういうミステリアスなところが好きだったわけだが」

懐かしむような口調で一志は呟く。そんな彼を見て、俺が瞳から告白を受けたこと、やはり話しておかなければならない気がした。

「なあ、一志聞いてほしいことがある」

「なんだ？」

「俺……岩泉先生……いや、瞳から告白されたかもしれない」

「なんだと!？」

一志に遊園地での出来事を告げた。余すことなく全て話し終えると怒っているのかプルプルと身体を震わせている。

「なるほどな……やはり、瞳はお前を選んだのか」

「だ、だがまだ好きだと言ったわけじゃ……」

「お前も本当に鈍いな。今時、はやんねえタイプの主人公だぞ。それは」

「俺は漫画の主人公じゃないよ」

「主人公になりきって漫画を描く。それが漫画の基本だろ？」

「い、いや……確かにそうなんだが」

「ずっと一緒にいたいかな……あいつらしい答えだな。それで、健二はどうなんだ？」

「ど、どうって……」

「瞳のこと、好きなのか？」

どうなんだ俺は。瞳のことが好きなのだろうか。仕事の時はともかくとして、それ以外は妹と接するような感覚であった。

「わ、分からない……」

「ふん、そうか分からないか。俺なら即答で好きって言うんだがな。考えても答えが出ないっていうならじっくり考えるんだな」

「あまり、考えている時間もないんだけどな……」

「どういふことだ？」

千尋さんから明日までに答えを出すよう言われいてることを一志に伝えた。

「お前らの担当、色々とぶっ飛んでやがるな」

「ま、まあ……確かに」

否定はできない。アシスタントする時も心底驚かされた。編集者は千尋さんほどぶっ飛んでいなければやっていけないものなのかもしれないが。

「しかし、明日までに答えが出せないってんならちよつとばかし俺も手伝ってやるとするかな！」

「そ、それは一体どういう……」

「今から俺が出す質問にイエスかノーで答えろ。もし、分からない場合は分からないと答えてくれ。その結果を元に健二が瞳を好きなのかどうか判断する」

「なんだよ、その判断基準……」

そんなフローチャートのようなやり方で俺が瞳を好きかどうか判断するというのが。俺は理論派だからな。自分のことはともかく、他人の行為は客観的材料で判断するしかない。まずは一つ目の質問だ。瞳の漫画は好きか？」

「ああ。好きだ」

はつきりと肯定する。元々俺は『桃仁少年』のファンであった。そして、アシスタントをすることにより『桃仁少』年の魅力が分かったと言えるだろう。

「聞くまでもなかったか。二つ目の質問だ。瞳と一緒にいるのは楽しいか？」

「ああ、すごく楽しいよ」

連載が取れなくて焦りを感じていた。アシスタントを始めてからも連載を取らなければという思いは確かにまだあった。

だが、瞳と出会ってから確かに変わったのだ。とても楽しかった。紛れもなく楽しかった。

「そうか。三つ目の質問だ。瞳といるとドキドキするか？」

「え？ す、少しドキドキするかな」

そう答えると、一志の表情が険しくなった。一志は勢いよくコップになったコーヒを全て飲み干す。

「あれほどの美少女を見て、少ししかしないのか？」

「な、なんとというかその……瞳を見ていると落ち着くというか安心感がある」

「な、なんだと……そんなのまるで夫婦じゃないか」

「ふ、夫婦?!」

一志の口から驚くべきキーワードが飛び出し、思わず狼狽した。

「普通、異性と同じ屋根の下で暮らせば緊張するもんなんだよ。それを安心なんて、もう家族レベルだろう」

家族———そうか家族か。一志の言う通り、元々成り行きで瞳と一緒に暮らすことになったのだが、思ったよりあっさりを受け入れ、その生活に適應することができた。

家族並みに相性がいいのかもしれないな。

「四つ目の質問だ。瞳の良いところが十個以上思いつく」

「思いつくよ」

「そうか。なら、とりあえず十個上げてみてくれ」

……この場に本人がいなくて本当に良かった。いたら恥ずかしくて爆死しそうだ。

「まず一つ目は漫画への情熱が深い」

これは言わずもがな。瞳の漫画への情熱には本当に驚かされる。俺以上にいつも漫画のことで頭がいっぱいで驚かされる。

「仕事が早い。プロ意識がある。締切を絶対に間に合わせる」

一気に瞳の良いところを三つ挙げた。瞳と仕事をしていて思ったことを述べる。

クオリティを下げることなく、締切に間に合わせる為に最善を尽くす。

プロとして、当然と言えば当然の行為なのだがこれを守れているものは何気に少ない。

どうしたって厳しい締切に間に合わせるために妥協をすることはある。

しかし、瞳は絶対にそんなことはしない。

「漫画のことばかりだな。漫画以外のことで挙げてみるよ」

「ああ。心配りが聞く。優しい。ちよつと天然だが見ていて癒される。あと……か、可愛……」

言っていて思わず顔から火を吹き出しそうになる。とても恥ずかしい。

「ま、俺が惚れた女だし当然だな。それじゃ、最後に三つ挙げてみるよ」

「一緒にいると安心感がある。なのに、いつも少し無理しすぎて危うさがあったてなんとかしてあげたくなる。だから……」

そうか。ようやく分かってきた。俺が瞳にしてあげたいこと。俺がやりたいこと。

「一緒にあいつの側と歩いていたいと思わせるんだ」

気がつけば、自分の目から雫がこぼれ落ちていた。自分でも驚きである。

どうして泣いているのか、自分でもよく分からない。

自分の思いを述べると、一志は何かを悟ったように目を瞑り、軽く息を吐いた。

「なるほどな。俺の思った通りだ最初から答えが出てるじゃねえか。一応、聞くぞ。最後の質問だ。今すぐ瞳に……会いたいのか？」

「ああ。会いたい、会いたいよ！」

今すぐにでもこの場から去って瞳と会いたい。

瞳と過ごした日々はとても充実していて楽しいものであった。なのに、自分の気持ちを押し殺し、連載の為だからと気づかない振りをしていたのかもしれない。

本当に愚かものである。例えば俺が瞳のアシスタントじゃ無くなったとしても、心の中で俺は瞳と一緒にいたかったのだ。

「お前はやっぱり瞳のことが好きなんだな。最初に会った時から薄々気づいていたけどな。瞳もお前を選んだみたいだ……俺はもう瞳のことは諦めるよ」

一志は立ち上がり、伝票を手を持って立ち去ろうとした。

「か、一志！ ありがとう。本当に、ありがとう！」

一志は振り向かずに足を止めた。

「瞳を傷つけた俺が言うのもなんだが……あいつのことよろしく頼む。あと」
顔をこちらに向け、闘志に満ちた表情で、

「漫画じゃお前に……いや、『お前達』に負けないからな」
宣言してきた。勿論、俺だって負ける気など全くない。

新たな始まり

次の日、俺は千尋さんの約束通り十時にいつものファミレスに訪れていた。

「お待たせしました」

「お疲れ様。健二くん。よく約束通り来てくれたわ」

「締切を守る。漫画の勤めですから」

もうすでに答えは出ている。いや、これから俺がすることは自分の思いを瞳にぶつけるだけではない。千尋さんにも関係する話だ。

「さすが健二くんね。他の先生にも聞かせて上げたいくらいだわ。お昼ご飯は食べた？」

「いえ、まだです」

「なら、岩泉先生のところに行く前に食べておきましょう。何食べる？」

「それじゃ、オムライスで」

昼食を食べ終わると、支払いを済ませ車で瞳が住んでいるマンションへと向かった。

都内の一等地に構える高級マンション。まだ数日しか経ってないのにとっても久しぶりな気がした。

エレベーターで上の階へと上がり、瞳の部屋の扉の前に立つ。千尋さんがインターホンを押す。

「お疲れ様。岩泉先生、千尋です」

「はい、今出る」

瞳の聲が耳に届く。心臓がドクンと激しく振動する。ガチャッと扉が開くと、瞳の顔が見えた。

「千尋さん……それと健二くん」

瞳の髪はボサボサでスツピンであった。瞳は逃げるように扉を閉めようとした。しかし、それを千尋さんは防いだ。

「どうして閉めるの？ 岩泉先生」

「どうしても何も……なんで健二くんがいるの!？」

「私が付いてくるように行つたからよ。いきなり解雇するなんてひどいと思わないの？ 労働基準法違反つて奴よそれ」

「そ、それは……だって」

瞳は扉から手を離し、項垂れた。瞳が泣いているのが分かった。

「私、健二くんに対してどう接したらいいか……分からなくなつて」

「とりあえず、ここだと何だから私たちを家の中に入れてくれるかしら？」

瞳は頷くと、俺たちを家の中に招き入れた。仕事場は控えめに言って偉い有様であった。

「うわ……」

千尋さんが素でドン引きしている。床には何やら殴り書きされた原稿とカッターメンの殻が散乱しており、とても女性が住んでいる家とは思えない。

「健二くん！　まずは掃除よ！」

「は、はい！」

「わ、私も手伝う……」

まだ傷心状態である瞳は責任を感じているのか掃除を手伝おうとした。

「岩泉先生はとりあえず自分の部屋で休んで！　掃除終わったらお知らせから！」

千尋さんがそう告げると、瞳は指示通り自分の部屋へと向かった。三十分ほど時間を掛けると、何とか部屋を綺麗にすることができた。

「こんなもんかしらね。それじゃ、健二くん。今、岩泉先生を呼びに行ってくるから」

「はい、お願いします」

千尋さん達が戻ってくるのを待っていると、瞳が使っている机の上にある原稿に目がいった。

「これは……」

一目で分かるほどに原稿が荒れていた。集中線は乱れており、キャラの書き分けもうまくできていない。

それに背景が全く描かれていない。こんな読者が読んだら何事かと思うだろう。「精神的ショックを受けると描けなくのは瞳も同じなのか」

扉が開く音が聞こえた。振り向くと、瞳と千尋さんが部屋に戻ってきている。

瞳は相変わらず髪がボサボサであるが、化粧を施しているのが分かった。

「それじゃ、二人とも座ってちょうだい」

俺と瞳はテーブルを挟んで向かい合うように座る。距離的には僅かしか離れていないはずだが、心理的にはとても遠くに感じるように感じる。

「それじゃ、私は外で待ってるから。健二くん、終わったら連絡ちょうだいね!」

「え?」

千尋さんは躊躇うことなく、部屋の扉へと向かった。

「ちよ……ちよつと、千尋さん!」

俺が呼び止めるも、千尋さんはそくさと部屋を後にした。部屋には俺と瞳の二人きりになった。

「……」 「……」

気まずい沈黙が続く。何か……何か話さなければ。動き出さなければ何も変わらな

い。

「ねえ、健二くん」

「な、なんだ？」

俺が話そうとした瞬間、先に瞳が話を始めた。

「遊園地で私が言った意味……分かる？」

「ああ、今なら分かるよ」

「そっか。良かった」

瞳が微笑んだ。瞳の笑顔をととても久しぶりに見たような気がする。

「それじゃ、答えを聞かせてくれる？」

「ああ。瞳……俺は瞳のことが好きだ。俺も瞳と同じ気持ちだよ。俺も瞳と一緒にいたい」

躊躇うことなく自分の思いを伝えた。緊張のあまり、口の中がとても乾いている。

「そ、そっか……健二くん、すごく嬉しいよ……」

「瞳はどうなんだ？」

「どうって？」

「俺のこと……好きなのか？ 男として」

そこがどうしても気になっていた。連載もしていない。漫画家として天地として差

がある俺のどこを気に入ってくれたのか分からないのである。

「うん、好きだよ。当然じゃん。優しいところも、漫画に一生懸命なところも……全部好きだよ」

全身から何とも言えないような気持ちが湧き上がってくる。俺と瞳は確認し合うようにお互いの表情を見つめあった。

「だからさ、連載してアシスタントを辞めることになっても一緒にいてよ。確かにこれまで通り一緒に暮らすのは厳しいかもしれないけど、たまにあってくれるだけで私は……」

「すまない瞳。俺の性格上、もしお互い離れて暮らしてしまったら、漫画のことを優先して付き合っても別れてしまうような気がするんだ。そう思わないか？」

「そ、それは……」

お互い漫画に対して熱い情熱を持っているのだ。そうなってしまったても何ら不思議ではない。いや、その可能性の方が高いだろう。

「それじゃ、健二くん。好きだけど付き合うことはできないっていうことなの？」

「いや、そういうわけじゃない。今日は瞳に告白と……提案しにきたんだ」

「て、提案？」

「ああ。俺と一緒に漫画を描いてくれ！」

「えっと、それって……」

瞳は俺が言わんとして、いることが理解できていないようである。

「つまり……逆に今度は私が健二くんのアシスタントになってほしいってこと？」

「いや」

俺は首を横に振る。

「さっき言った通りだ。俺と一緒に漫画を描いてほしい。カギリリス先生いるだろ？」

千尋さんから訊いたんだ。作画とストーリーを分業している二人組だつてな」

アシスタントしている時、たまに考えていたのである。

自分だけじゃなく、瞳と一緒に漫画を描けばすごい作品が出来上がるのではないかと。

「つまり……どつちかがストーリーを考えて、どつちかが作画を担当するみたいな感じ」

「それもいいかもしれないが……絵のレベルは同じくらいだし、カギリリス先生みたく完全に分業しなくてもいいかもしれないな。お互い話し合ってストーリーを考えて、作画も二人でやるみたいだな」

俺の考えを訊いた瞳は目の色を輝かせた。

「なるほど……確かに面白そうだね」

「だろ？ 『桃仁少年』が終わった後にでも一緒に組まないか？」

「うんいいよ！　と言いたいところだけど、まずは千尋さんに説明しておかないとだね」
「だな」

俺はスマホを取り出し、千尋さんと呼んだ。電話を切り、千尋さんがやってくるのを待つ。

「あと、確認なんだけどき……漫画は一緒に組むとして……付き合ってくれるんだよね？」

「勿論。よろしくな。瞳」

「うん、健二くん！」

瞳は嬉々とした様子で椅子から立ち上がると、顔を近づけてきた。

「それじゃ、付き合った記念に……キスしよ？」

桜色の唇を近づけてくる。瞳。おいおい、付き合った初日にキスとか普通なのか。

「ま、まだ付き合ってから一日も経過してないだろ？」

「したいからするんだよ。健二くんだって、漫画を描きたいから描いてるんでしょ？」

「漫画はそうだけどな！」

全くもって今俺たちがキスをする理由になってない気がするのだが。瞳はなかなか肉食のようである。

「もう、焦れたいな」

瞳はやや強引に俺の唇を奪ってきた。びっくりしてつい目を瞑ってしまった。まさか、ファーストキスがこんな感じとはな。

ロマンチックなのかそうでないのか、よく分からない。ゆっくりと目を開けると、とんでもないものが目に入った。

瞳の背後に千尋さんがおり、口元を抑えて目を大きく見開いている。

「け、健二くん……」

「あ、あの……いや、これはその……」

千尋さんはニツコリと微笑み『パチパチパチ』と拍手してきた。

「おめでとう！ 実にめでたいわ！」

「ちよつと待つてください！ 訊いてくださいってば……」

千尋さんが戻ってきたところで、俺と瞳は二人組の漫画家としてやっていきたいことを説明した。

「なるほどね……二人で漫画を作りたいってことね。カギリリス先生みたいね」

「そうですね……いや、カギリリス先生のスタイルとはまた別になるでしょう。ストーリー作りも作画も二人でやることになるんですから」

「それじゃ、編集者の視点で言わせてもらうけどね、そのやり方はオススメできないわ」

ひどく冷たい口調で言い放った。完全に仕事モードである。

「ど、どうしてですか？」

「カギリリス先生のように、完全分業ならともかく、ストーリー作りを二人でやると揉めることがあるのよ。それに、負担も必ずどつちがか大きくなる。多分……岩泉先生の方に負担が行くわね。少なくとも最初の方は」

これは否定できない。まだまだ話を作る技術は未熟である。

「千尋、私は健二くんが私より劣っているだなんて思わない」

「どうしてそう思うの？ 岩泉先生」

「一志くんと肩を並べたから」

「それはあくまで読み切りだったからよ。連載と読み切りは別物よ」

全くもってその通りだ。長期連載になると、毎週のように新たに話を組み立てていかなければならない。矛盾が生じず、かつ読者を引き込む内容で。

「やってみなければ分からない。それが、千尋の口癖だったじゃん」

「まあ、そうなんだけど……正直に言うかね。私はお互い一人で描いても傑作が生まれると思うのよ」

「千尋さん、なら二人で作れば大傑作が生まれると思いませんか？」

「それこそ……やってみなければ分からないってところだわね」

千尋さんが呆れたように苦笑した。その様子はまるで手の掛かる子供を相手しているようである。

『パン』と千尋さんが手を叩いた。

「うん、分かった！ 二人で漫画を作ってみるといいわ。ネームを見てから判断するから。あと、岩泉先生。桃仁少年の方はちゃんと完結させてくださいね」

「うん、ありがとう千尋！」

「ありがとうございます。千尋さん」

「気にしなくていいわ。ただし、二人で作る漫画は完全新作にしてね……エレメントドラゴンを改良してのなんて持ってきたらそっこーシユレツダー行きだからね」

恐ろしく低い声で宣言してきた。これは……ガチだ。

「のぞむところだよ、千尋。新作楽しみにしてて」

「うん。それじゃ、二人とも新作待ってるわね」

こうして、一度はアシスタントを解雇された俺であったがこうして無事に再びアシスタントに戻るようになった。

連載に向けて

「終わったー!」

俺と瞳はハイタッチした。ようやく『桃仁少年』の最終話の原稿が終わった。最終話ということもあり、全てのコマに魂を注ぎ込めて描いた。

「お疲れ様、健二くん!」

「瞳もお疲れ様」

桃仁少年は一番盛り上がったところで終わったと言えるだろう。こんな風に最終話を迎えられる漫画はそうそうない。

「うん。けど、休んでる暇はないよ!」

「だな」

俺たちは新しい漫画を描かなければならない。千尋さんをうんと唸らせるような漫画を。

「それじゃ、早速新作のへの打ち合わせと行こうか」

まずはお互いに描きたいジャンルを話し合う。出てきたものの中から得意なジャンルへと絞り込み、お互いの持ち味を出せそうなものを選択する。

次に舞台を決めていく。現実に近い世界にするか、ファタジーの世界にするか。

そして、主人公の設定を考えていく。主人公の性格、能力、背景など。細かく設定していく。

一人で考えるとなかなか進まないものであるが、瞳と一緒にだとドンドン面白いアイデアが生まれていく。その分、絞り込んでいくのも大変であるのだが。

そうしているうちにあつという間に時間が過ぎていった。

「とりあえず今日はここまでにしようか」

「そうだな」

メモ帳には文字がビッシリと羅列されている。

「健二くん、明日の昼くらいまでに設定を元に主人公のイラストを何枚か描いてみてくれる？ 私も描いてみるから」

「分かった」

まだ大まかにしか主人公のイメージ像が浮かんでいないが、描いていくうちに主人公像というのが鮮明になっていくことだろう。

その日の夜、俺は自分の部屋で早速、主人公のイラストを描いてみることにした。

主人公は中肉中背で茶髪の少年。目元をやや切れ長にする。

主人公の絵を一枚描いてみたが、『どこにでもいる普通の少年』といった感じだ。

「これじゃ、印象薄いよな……」

主人公は異世界転生によって、舞台となるファンジターの世界へとやってきた。生前は若いサラリーマンで、会社に馴染めず不幸な事故でなくなったという過去を持つ。

「もうちよつと、暗そうな感じにするか」

雰囲気を変えるため、目元に隈を付け足した。確かに暗そうな感じにはなったが、これじゃ逆に敵っぽい。

「くそ……難しいな」

結局、その日は朝まで試行錯誤しながら主人公のキャラクターを描くことになった。

次の日、俺は瞳と朝ごはんを食べた後、睡眠を取った。昨夜の夜に徹夜したためである。

起きると、早速昨日描いたイラストを持って、仕事場であるリビングに向かった。

「おはよう、健二くん。すっかり眠れた？」

「ああ、まあな」

おはようつていうかももうお昼なんだけどな。俺はテーブルに描いたイラストを並べていた。

「うわあ、すごい。こんなに描いたんだ？」

「瞳のも見せてくれるか？」

「うんー！」

瞳から五枚のイラストを受け取った。さすがは瞳である。どれもこれも主人公がかっこいい……というか美形である。

「健二くんのイラスト、やっぱりいいね」

「瞳、正直に言ってくれ。瞳が描いたものの方がいいと思うか？」

「うん、どうだろ。私、主人公はかっこよくしなきゃって思ってた……けど、健二くんのイラストを見ると割と普通の主人公でも良いかなって思ってきたよ」

確かに俺は出来るだけ普通にしつつ、どこか普通とは違うように描いた。

言葉で説明するのはとても難しいが、物語の主人公にする以上、『完全な普通』ではダメなのだ。

「瞳、普通じゃダメなんだ。俺が描いたイラストの中で一番、普通じゃないのってどれだと思う？」

「うーん、これかな？」

瞳が指差したイラストは最後に描いたイラスト——見た目的な特徴は薄いもの、目つきが悪く、どこか近寄りがたい雰囲気を持つ少年である。

「そうか。俺も自分が描いた中ではこのイラストがいんじやないかって思ってた」

「なら、この子にしよう！」

「いいのか？」

「うん！」

あつさりと瞳は主人公のデザインを俺が最後に描いたイラストにすることに納得した。

「健二くんが魂を込めて描いた主人公だもん。必ず面白くなるよ！」

「そ、そうか……そうだな」

「それじゃ、主人公のデザインも決まったところで一話目のネーム作りといこうか！」
「だなー！」

瞳と話し合い、一話目のネームの構想を練っていく。冒頭は主人公が異世界転生するところから始める。

会社で上司に叱られている主人公。半ば人生に絶望しつつ、歩いていると、主人公は腕に痛みを感じた。

不運にも主人公はスズメバチに刺された。蜂に対してアレルギーを持っていた主人公はアナフィラキシーショックにより命を落とした。

目を覚ますと、主人公はエルフ、獣人族といった元の世界では見たことない種族を目の当たりにする。自分の頬を抓ってみると痛みがあり、夢ではないことに気づく。

これは異世界転生だと理解した主人公は異世界転生お約束の神からチート能力を与

えられたと思い込み、冒険者になることを決断する。

冒険者になるには少なくともモンスターを倒すという実績が必要となる。

主人公は冒険者になるべく、弱いモンスターがいるという試練の森に入ることにした。

しかし、無謀にも装備なしで森に入ったため、早速ピンチに陥った。

モンスターである『シャープネイルベアー』という熊のモンスターに出会ってしまった。

地面にある石を投げたり、魔法の使用を試みるも全て失敗に終わった。

腰が引けて動けなくなった主人公の顔面に熊の鋭い爪が降り注ぐ——その瞬間、主人公の身体は人間の身体から蜂の姿へと変貌した……というところで一話目が終わる。

「一話目はこんな感じかな」

「掴みとしてはいいかもな。二話目はどうする?」

「そりゃ、もちろん。熊を爽快に倒しちゃうでしょう!」

「まあ、そうだな。こういうの今流行ってるんだっけ? 異世界転生モノとかいうやつだろ?」

俺はあんまり目にすることはないが、ラノベで流行っているジャンルらしい。主人公が異世界へと旅立ち活躍するのが主流であるが、必ずしも主人公が強いとは限らなかつ

たりする。

「うん。奈緒ちゃんが小説家を目指しているってのを聞いてピーンと浮かんできたんだ。私、結構ラノベも読むんだよね」

「ラノベか……俺、あんまり読まないんだよな」

俺は活字に触れるのがあまり得意ではない。文字ではなく絵でストーリーを楽しむと思うタイプである。それゆえ、文字が多い漫画も個人的にあまり好きではない。「そっか。健二くんも読んでみたらいいよ。オススメは『このすず』とか『リイチ』とかかな」

「あ、ああ……暇な時にでも見てみるよ」

瞳の勢いに押され、ラノベを読むと宣言した。漫画の為であると思えばそれほど苦ではないが漫画よりも読み終えるのに時間が掛かるだろう。

瞳と共に二話目と三話目のネームの叩き台を数日間掛けて作り上げていく。

主人公のスキルの設定、三話目に登場する主人公の仲間の職、服装、扱う武器のデザインなど、細かく考えていけばかなりの時間が費やされる。

叩き台が完成したら、そこからさらに時間を掛けてネームを作り上げる。ネームはあくまでも完成版である原稿の設計図となるものであるが、千尋さんにも分かるように書かなければならない。

コマ割りについて、あーでもない、こーでもないと言ったと瞳と四苦八苦しながらもなんとかネームを作り上げた。

「や、やっと……三話目まで終わったね」

「だな……」

徹夜で作業し、時刻は午前八時となっていた。千尋さんにネームが完成した旨、連絡すると、『十二時頃に向かおうと思うんだけどどうかしら?』と返ってきた。

「千尋さん、十二時に来たいって」

「私は大丈夫だよ」

「そっか。それじゃ、返信しておくわ」

「うん。私、ちよつと寝てくるね」

瞳は椅子から立ち上がる、自分の部屋へと戻っていった。俺は合鍵を持ち、家から出て『とある場所』へと向かうことにした。

新しい物語

最寄駅から電車に乗り継ぎ目的地の近くである駅に降りる。

「この辺も懐かしいな……」

かつて、俺が歩いているのは瞳のところのアシスタントする前に住んでいたところの近くである。この辺の通りには安い定食屋や古本屋などがあり、よく気分転換に利用していた。

やがて、目的地に到着し、建物の中へと入った。

「いらつしやいませ」

久しぶりに聞いた高めの高音が鼓膜に響く。

「お久しぶりです」

「あら、健二くん。久しぶりね！」

明梨さんが驚いた様子を見せた。久しぶりに元バイト先に顔を出そうと思ったのである。

「明梨さんも元気そうで何よりです」

「そうね。それより、漫画読んだわよ。面白かったわね、『エレメントドラゴン』！ あ

れ、連載されるの?」

おお、明梨さん。俺の読み切りの漫画、読んでくれたのか。とても嬉しい。

「いえ、それとは別の新しい漫画を描いています」

「そうなんだ。もう、連載決まってるの?」

「いえ、まだです。けど、必ず連載してみせますよ」

「そう。楽しみにしてるわ。私も健二くんがバイトを退職してからね、色々考えたのよ。私も夢に挑戦しようと思うわ」

「明梨さんの夢ですか?」

「ええ。またゲームを作ろうと思ってね。昔、ゲーム会社で働いていたんだけど、知り合いに新しく立ち上げるゲーム会社を立ち上げる人がいて一緒に働いてみないかって誘われてね。挑戦しようと思ってるわ」

初めて聞いたな。明梨さん、ゲーム会社で働いていたのか。確かに休日はよくゲームしているとは言っていたが。

「そうなんですか……俺はいいと思います! 頑張ってください! ゲーム完成したら教えてください。俺、絶対にプレイしますから!」

「ふふ、ありがとう。健二くんも漫画、頑張ってるね」

「はい!」

元バイト先を後にした俺は近くのお店でご飯を食べ、瞳の家に戻り千尋さんがやってくるのを待つことにした。すでに瞳は起床しており、机の上で何かを描いている。

インターホンの音が聞こえた。おそらく、千尋さんだろう。玄関に向かって確認すると、予想通り千尋さんであった。

「お疲れ様です」

「お疲れ様。それじゃ、失礼するわね」

千尋さんが家に取り込み、椅子に座ってもらった。俺と瞳も千尋さんと対面するようになり、完成させた『ビーウォーズ』という漫画の三話目までのネームを渡す。

「それじゃ早速、読ませてもらうわね」

「お願いします」

千尋さんはいつもより、ゆっくりと時間を掛けて一ページ一ページ読み込む。その間、静寂が部屋を満たし何とも言えない緊張感が漂っている。三話目まで読み終えるのに二十分ほど時間が掛かった。

「読み終わったわ」

「ど、どうだった?」

瞳が恐る恐る千尋さんに漫画の出来を尋ねる。俺もかなりドキドキしている。

瞳と一生懸命話し合い、完成させたネームだ。自分でも面白いという自覚はある。し

かし、プロの編集者である千尋さんを納得させられるものはまだ不明だ。

「すごく……面白かった」

ニツコリと千尋さんが微笑んだ。ちゃんと目も笑っている。この場合は裏のない賛辞と捉えてもいいだろう。

「ほ、本当ですか！」

「ええ。異世界転生モノっていうのかしら。私もあまり担当したことのないジャンルだけど、今のジョークにしては斬新な設定だと思ったわ。あとは細かいところを直していけば充分に連載を狙えると思う」

「分かりました。早速ですが、どこを直せば良いでしょうか？」

「そうね……まず、主人公が異世界に転生するまでの過程をもう少し詳細に描いて……」
三人で打ち合わせを開始した。

千尋さんのアドバイスを元に時間を掛けて、さらに数日程時間を掛けてネームを改良していく。

なんとか完成させたネームを千尋さんに渡し、連載会議に渡してもらったことにした。

「連載決まれば良いね」

「そうだな」

十一月の中旬。今日は連載されるかどうか、決まる運命の日である。俺も瞳もソワソ

ワしながら、千尋さんの連載を待っていた。

「それにしても一志くんの漫画すごい人気だね」

俺と同時期に読み切りで掲載された『電脳ゲーム ブラックルーム』は前作『ギャンブル王 匠』と入れ替わる形で連載となり、ここ最近のジヨークについて高い順位を保っている。

「そうだな。負けてられないな」

郡山一志先生にもカギリリス先生にも負ける気などない……といってもまずは連載を獲らなければ始まらないのだが。

するとテーブルの上の置いていたスマホが振動した。

「健二くん！ 電話きたよ！」

「あ、ああ！」

昂ぶる気持ちを抑えながら、俺は電話に出た。

「もしもし、健二くん？」

電話越しから千尋さんの声が耳に届く。

「千尋さん！ どうでした？」

電話に出て、すぐに結果を尋ねた。しかし、千尋さんは沈黙したまま言葉を発しない。

「健二くん。本当に頑張ったわ」

恐ろしく低い口調であった。声を聞いてすぐに察してしまった。今回はダメだったのだろう。

「そうですか……また頑張ります」

俺は電話を切ろうとした。

「ちよ、ちよつと！ 連載になったのよ！ 分かる!」

千尋さんが声を荒げた。なんだよ、連載獲れたのか。暗い雰囲気と言ってきたから勘違いしてしまった。

「そ、そうですか！ すごく嬉しいです!」

テンション高めに叫ぶと、隣にいる瞳が「よし!」とガッツポーズをした。

「私もよ! まあ、連載にならないはずがないって思っていたけどね。明日、連載に向けての打ち合わせをお願いして良いかしら? 十時くらいにどうかしら?」

「大丈夫です!」

「それじゃ、明日よろしくね!」

千尋さんは電話を切った。俺と瞳はその場でハイタッチをした。

「やったね! 健二くん!」

「ああ!」

用意していた祝福用のケーキを瞳とともに食べた。もしもダメだったら残念会用の

ケーキとなるはずだったものである。

次の日、約束通り千尋さんが十時にやってきた。

「まずは二人共、連載おめでとう。だけど、本当の戦いはこれからよ」

「そうですね！」

「それで千尋。連載会議用に描いたネームから修正するの？」

「そうですね……連載会議で出た意見としては一話目が少し駆け足気味っていうのがあったわ」

「駆け足気味か……確かにそうである。」

「でも、主人公が蜂になって終わる。この引きだけは絶対に変えるわけにはいかないよ」

瞳がハッキリと主張した。

「俺も同意見です。出来るだけ読者に駆け足気味だと思われないうように改善してみます！」

「いや、でも……今のままでも充分に面白いって言われているのよ」

「最高の形で一話目を迎えたいからね。直すよ」

「そう。二人が言うのなら止めはしないわ。一応言っておくけど新年会は必ず出てね」

新年会か。俺が連載を獲った時以来だな。

「カギリリス先生は出ますか？」

「多分、奥さんの方は生まれたばかりの子供の面倒とかあるから出れないと思うわ」
「では、夫の方が出るといっわけですね」

できれば二人に会いたかったがしょうがないか。

「多分、そうだと思うわ」

「健二くん、本当にカギリリス先生に会いたかったんだね」

「そりゃあな。小学校頃からのファンだからな」

会ったら絶対にサインを貰おう。

「二人とも取り敢えず新年会には絶対に出てね！絶対だからね！」

千尋さんが新年会に出るよう強く念を押してきた。噂によると、特別な理由で新年会を欠席した漫画家の担当は何か罰ゲームをやらされるらしい。

編集者も実に変である。

十二月中、俺たちは作業に追われた。一話目を何とか改良し、そこから原稿に取り掛かる。

魔道具といった小道具の描写、中世風の建物の絵に力を入れていたらあつという間に時間が過ぎていく。

「あー、何とか終わったなあ……」

大晦日もほとんど仕事で終わり、すでに新年が明けてしまっている。

「だね。仕事納めが年越しになるとは思わなかったよ」

「ま、全くだな……」

「ねえ、健二くん。初詣行かない？」

「これから？」

「うん、どうかな？ 家の近くに神社があるんだけどそこにさ」

「いいな、行くか！」

俺たちは身なりを整え、初詣へ向かうことにした。深夜であるが元旦ということもあってか、神社には予想以上にたくさんの方がいる。

参詣者の列に並ぶ、順番を待つ。

「健二くん、何円入れる？」

「えーと……五円かな」

「そっか。私はどうしようかな……」

「穴が空いた硬貨は縁起が良いって言われているから五円か五十円にしたらどうだ？」

「そうだね……じゃあ、八円にするよ」

「八円そうか」

理由は何となくだが察した。俺たちの漫画に関わる数字である。

「健二くんは何て願うの？」

「そうだな……健康に過ごせますようにって願おうかな」

「漫画のことは願わないの？」

「それは……神様の力じゃなく、自分の力で達成したいだろ」

我ながら面倒くさい性格だとは思う。だが、漫画に関しては神様にも願ったりしたくない。

「健二くんらしいね」

「瞳は何を願うつもりなんだ？」

「秘密」

瞳は意地悪く微笑む。ちょうど順番がやって来たため、俺が五円、瞳が八円を賽銭箱に投じた。

鈴を鳴らし、二拝二拍をし、心の中でお願いをする。

——健康でいられますように。そして……

——隣にいる大好きな人と末長く一緒にいられますように。

願いごとを心の中で言い終えると、最後に一礼した。お参りを済ませた俺たちは家に向かう。

この一ヶ月はずっと働きづめであった。明日はしっかりと休むことにしよう。新年

早々、寝正月となりそうだ。

「さつきさ……私、健二くんはずっと一緒に入られますようにってお願いしたんだ」

ドクンと心臓が大きく鼓動する。俺と同じ願いをしたのか。

「お、俺も……瞳と未長く一緒にいられますようにってお願いした」

瞳は手を握って来た。

「私たち、やっぱり相性バツチリだね。漫画も……恋愛も」

「そうだな」

正月三ヶ日が過ぎ、俺と瞳は都内の某高級ホテルに訪れていた。すでにジョークで連載している先生達が会場にいた。

「や、やばい……なんだか緊張してきた」

どの先生も何と言うかこう……雰囲気が違う。ガラガラしている。

「緊張しすぎだよ！ もっと気楽に行こう！」

「そ、そうは言ってもな……」

「お、誰かと思えば二人組の先生じゃないか！」

背後から声がし、振り向くと一志が立っていた。

「か、一志くん……」

瞳は俺の服の袖を掴むと、ひよっと俺の背中に隠れた。そんな瞳の様子を見て、一志は明らかにシヨックそうである。

「お、おい瞳……さすがに今の態度はひどいぞ」

「そ、そうだね……ごめん。一志くん」

瞳は一志に頭を下げた。一志は複雑そうに瞳を見つめる。

「いや、いいんだ。元はと言えば俺のせいだしな。お前らほど相性の良いカップルもそうそういないだろうし、もう諦めてるよ」

「一志くん……」

「それより、随分と人気みたいだな『電腦ゲーム ブラックルーム』」

「まあな。来週はセンターカラーの号だし、悪いがお前らには一位は渡せないな」

「いや、一志くん！ 悪いけど、一位は絶対に貰うから！」

さつきまでの態度が嘘のように瞳が宣戦布告した。

「ああ、絶対にお前らには負けないからな。やっぱり瞳はこうでなくちゃな」

「あ、え……えつとその……」

さつきの宣戦布告を恥ずかしく思ったのか瞳はアタフタしだした。

「それじゃ、俺ちよつと別の先生のところへ挨拶に行ってくる」

一志はその場を後にした。

「一志くん、本当に手強そうだね」

「そうだな」

「実際に手強いわよ」

「うわ！」

ふと背後から声がし、振り返ると千尋さんが真後ろに立っていた。全く気配がしなかった。忍者かこの人。

「千尋。いつのまにいたの？」

「会場の準備で忙しかったんだけど、二人を見かけたからね。それより、『電脳ゲーム
ブラックルーム』、アニメ化の話も出てるらしいわよ」

「ま、マジですか……」

いや、あの人気だと驚くことでもないのか。むしろ、来てない方が不思議なくらいだ。
「ええ。だからこそ、こつちもアニメ化を目指すわよ！」

千尋さんは腕を大きく振り上げた。

「千尋、ちよつと気が早くない？」

「全く早くないわ！ 二人の漫画ならいけるから！」

そう言ってもらえたととても心強いが、まずは本誌で人気を捕るところからである。
う。

「あ、それと郡山先生の漫画、アニメ化の話が出てくることは内密にね。まだ言っちゃいけないことになってるから。それじゃ、私準備に戻るわね！」

千尋さんはそそくさと会場の準備へと戻った。言っちゃいけなかったのか。

「しまった、カギリリス先生が来ているか聞くの忘れてた」

「確か、あの人じゃなかったかな」

瞳は数メートル斜め前方にいる見た目三十代くらいの男性を指差した。白いワイシャツに黒いズボンを着用しており、スマホを真剣な様子で見つめていた。

目つきがやや鋭く、どこか不思議な雰囲気がある。

「そういえば、瞳はカギリリス先生と会ったことあるんだっけ？」

「まあ……話したことはないけどね」

「それじゃ、挨拶しに行くか」

「そうだね」

ついに憧れの人と会話が出来る——そう考えると心が躍った。ゆっくりと距離を詰め、恐る恐る話しかけることにした。

「す、すみません！」

「ん？」

スマホを注視していたカギリリス先生が俺たちの方を見た。

「来週号から連載になります。白河健二と言います。あの……俺、小学校の時に『ロボツト・プラネット』を見てずっと先生のファンになりました！」

長年の思いを力ギリリス先生に伝えると、目の前にいる憧れの人は「おお！」と感嘆の声を上げた。

「そうなんだ！　ありがとうございます。僕も自己紹介させてもらうよ！　原作を担当している鍵村絵留（かぎむらえる）って言います！　よろしくね！」

「よろしくお願ひします！」

深々と頭を下げた。すごく良い人そうだな。

「初めまして、岩木瞳って言います。健二さんと二人組で漫画をしています」

瞳も鍵村先生に対して、自己紹介をする。

「瞳ちゃんだよね！　前に桃仁少年連載してた！　うちの妻もすごく面白い漫画だって褒めてたよ！」

「ありがとうございます！」

「担当の千尋さんから奥さん、出産されたった聞きましたけど今日の新年会は欠席ですか？」

「あー、そうだね。今、子育てで忙しいからね……僕も手伝ってはいるけどなかなかね」
鍵村先生は「あはは……」と苦笑した。

「そうですか。できれば奥さんにも挨拶をしたかったんですが」

「さては……狙っているのか？」

鍵村先生から只ならぬ威圧感を感じる。これはまさか……霸王色の……？

「ね、狙ってませんよ！」

「あははは！ 冗談だよ。面白いな君は！」

鍵村先生は俺の肩を軽く叩き、笑い焦げる。なかなかノリが軽そうな人である。

「それに、隣の彼女が君の恋人なんだろう？」

「え、えつとその……」

「隠さなくなつて良いよ。何となく分かるんだ。君たちは僕と妻の若い頃になんとか

そっくりだ」

「そう……なんですかね」

「それは光栄です。鍵村先生。ですが、私は先生にも順位で負ける気はありません」

「お、おい……瞳」

先輩の先生に向かって流石に不躰な態度だと思った。しかし、鍵村先生は全く気にする様子はない。

「そうか。だけど、僕も……いや僕たちも簡単に上の順位を行かれるつもりはないよ。楽しみにしてるよ。若いお二人さん」

「は、はい！ よろしくお願ひします！」

「そうだ、せっかくだし妻の写真を見せてあげるよ」

鍵村先生はスマホを取り出し、写真を見せてきた。

眼鏡を掛けた長い黒髪女性が微笑を浮かべながら、赤ん坊を抱いている写真である。

「優しそうな人ですね」

写真を見て抱いた第一印象を呟いた。

「健二くん、こういう人が好みだったの？」

瞳がジト目でこちらを見ている。

「そ、そういう訳で言ったんじゃねーよ！」

「あはははは……優しいか。うん、いやあ……うん……」

多分、これはあれだな。尻に敷かれているのだろう。

「健二くん、せっかくだし連絡先交換しようよ！ 都合の良い時にでも遊びに来てくれ

！」

「いい、良いんですか!?!」

なんと、カギリリス先生の連絡先を入手できるとは。今日は幸運の日か。連絡先交換したら、そのまま新年会帰ってもいいまでである。さすがにしないが。

「うん、君たちが良ければだけど」

「お願いしますー！」

こうして、俺は鍵村先生と連絡先を交換した。

その後、新年会が始まったのだが、カギリリス先生の連絡先を入手して舞い上がっていたことでテンションがハイになっていたためか、あまり新年会の内容を覚えていなかった。

新年会も終わり、一月中旬の月曜日。今日はジョークの発売日である。そして、俺たちの漫画『ビーウォーズ』の一話目が掲載される号である。

時刻は夕方、そろそろ千尋さんから順位が知らされる頃であるが、まだ連絡は来いてない。

「お兄ちゃん、遊びに来たよー！」

はるばる、仕事場に制服姿の奈緒が現れた。突然の訪問に思わず顔が強張った。

「健二くん！ 奈緒ちゃん、私たちの漫画読んでくれたんだって！」

奈緒の隣に瞳が嬉しそうに報告した。この二人、結構仲が良いんだよな。よく連絡しているらしい。

「うん。『ビーウォーズ』、すごく面白かった！ 二話目どうなるの!？」

「さすがにそれは言えないよ」

「えー、教えて欲しいな。瞳さん、ダメ？」

瞳は苦悶の表情を浮かべた。そこまで悩むことでもないだろう。

「奈緒ちゃん頼みでも……それはできないかな」

「そうですか。まあ、しょうがないですよ！」

「それより、なんだその手に持つてるの？」

奈緒は右手に何やら大きな箱を持っていた。

「お祝い用にローストチキンとケーキを買ってきたんだよ！ お父さんに頼んで出してもらったんだ！」

「お、おお……そうか」

「もう順位は分かったんでしよう？ 一位？」

「いや、まだ出てないが……」

すると、インターホンの音が玄関から聞こえた。俺は玄関へと向かうと、扉の外には千尋さんが

「ち、千尋さん……どうしたんですか？」

いつもなら電話で順位を教えてくれるのだが、なぜか家にやってきた。

「千尋!! どうしてここに？」

「編集者さん？」

「お疲れ様。健二くん。郡山先生。それと……」

「いつも兄がお世話になってます！ 一志の妹の白河奈緒です」

「あら、健二くんの妹さんね。お久しぶりです」

「そ、それより千尋さん。どうしてここに？」

「順位出たからお知らせしようと思ってね。『ビーウォーズ』……なんと一位よ！」

「一位……」

全身の血が沸騰するほどの興奮と幸福感が湧き上がる。

一位と聞き、瞳も奈緒もハイタッチして喜んでいた。

「しかも、票数は四百四十票。この十年間の中でも歴代最高だそうよ！」

「や、や……やった……やった……」

近所迷惑も考えず、その場で俺は叫んでしまった。

「お祝い用に高級ワインも買ってきたし、今日はお祝いよ！」

「千尋さん以外、未成年なんです……」

「細かいことは良いのよ！ 健二くん、付き合いなさい！」

本当にこの人は……だが、この人のおかげで素晴らしいパートナーとも出会えた。

漫画家生活を続けていけばきっとこれから苦難は訪れるだろう。

だが、瞳や千尋さん、奈緒といった周りの人がいればきつとどんな苦難も乗り越えて

いけるか。

まあ、とりあえずは新連載一話目で一位になったことを手放して喜ぶとするか。